
詩歌にみる万葉時代の悲劇の皇子たち

杉山一男

Tragic Princes in Manyo Era As Seen in Poetry

Kazuo SUGIYAMA

Abstract

Many princes have gotten into the tragedy so far. This article will pick up some princes among these tragic princes who were born in Manyo era in the chronological manner, overview the background and circumstances leading to the tragedy, and approach their feelings from the poetry about the tragedy. Here, Manyo era is regarded as the period from 16th Emperor Nintoku to 47th Emperor Junnin, that is, about 350 years from the former half of 5th century to the middle of 8th century. The main cause of the prince's tragedy is the fierce armed conflict for takeover of political power among the imperial families involved in imperial succession, but some princes were abolished Crown Prince by the adultery of the uterine brother and sisters or some prince's family were overthrown by their retainers who held the great power. For example, many children and grandchildren of 16th Emperor Nintoku and 29th Emperor Kinmei died a violent death. Otomonomiko (Prince Otomo), child of 38th Emperor Tenji, defeated in Jinshin War. Arimanomiko (Prince Arima), child of 36th Emperor Kotoku, and Otsunomiko (Prince Otsu), 40th Emperor Tenmu, were trapped by machinations respectively and then forced to commit suicide by suspicion of rebellion. All princes Otomo, Arima and Otsu were well-educated people and left impressive poetry.

1. はじめに

古事記¹⁾の「上つ巻」や日本書紀²⁾(以下、書紀とする)の「神代」編には日本誕生の神話が述べられている。神話に登場する神々は日本列島に万年単位で住んでいた縄文人だろうとは思えない。恐らく、神々は、弥生時代になって大陸、主には稲作をもたらした中国江南の越や呉からの遺民であったり、その後、始皇帝が秦国を建てたときの騒乱を逃れて渡来した知識階級

近畿大学名誉教授

Professor Emeritus at Kindai University

や技術者が列島に定住して支配者層となった人々ではなかろうか。さらには、朝鮮半島の新羅・百済・高句麗3国の覇権を争う動乱³⁾で難民となった人々も含まれるであろう。

記紀には、日本の初代天皇は神武天皇(カムヤマトイワレヒコ)とある。神々の系譜(図1)から分かるように天孫族のイザナキとイザナミが国土の他、アマテラス、ツクヨミ、スサノオなどの神々を産む。アマテラスは祈請(誓約)によってオシオミミを産み、オシオミミの子がニニギである。アマテラスの孫ニニギが天上界の高天原から日本列島に天降ってきた。天孫降臨である。古事記によると、天孫ニニギの降臨の様子は、「天の石位を離れ、天の八重のたな雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天の浮橋に、うきじまり、そりたたして、**筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣**に天降り坐しき(高天原の堅固な神座を離れて、天空に八重にたなびく雲を押し分け、威風堂々と道を選び、途中、天の浮橋にすくとお立ちになって、そこから筑紫の日向の高千穂のクジフルタケに天降りなされた)」とある。ここに、**筑紫**(筑紫)は九州全体を指し、日向は日に向かう地という名称自体に意味があり、高千穂は高く積み上げられた稲穂の意である。ニニギはコノハナノサクヤヒメと結ばれ、ホスセリ(兄:海幸彦)とヒコホホデミ(弟:山幸彦)、その他を産む。海幸彦と山幸彦の争い神話は、天孫族と列島の先住民との争いの神話化であろう。戦いに勝利した山幸彦はトヨタマヒメと結ばれウガヤフキアエズを産む。ウガヤフキアエズとタマヨリヒメ(トヨタマヒメの妹)の間に生まれたのがカムヤマトイワレヒコ、即ち、初代天皇⁴⁾の神武であり、彼は日向国高千穂を出て、東征し、先住民の長髓彦を紀伊国で平らげ、紀元前660年、大和の橿原宮で即位したことになる。神武天皇から「神代」編は「人代」編に進むが、仲哀天皇(14代)の没後、神功皇后が新羅征討に向い、新羅・高麗・百済の三韓を服従させたというところで神話時代は終わるようだ。

小林⁵⁾によれば、ニニギが降臨した筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣(クジフル岳)とはタクラマカン砂漠の亀茲と表記するオアシス都市で、現在の中国新疆ウイグル自治区の都市クチャ(庫車)のことだという。神話の神々のルーツは神でなく亀茲の戦乱を避けて列島に辿り着いた渡来人とその末裔になるだろうという。そして、神話でニニギの子孫とされる神武天皇は高句麗を経て列島にきた人物だろうとしている。ともあれ、天皇の系譜は神武以後、連続と続き、昭和天皇は124代であり、今上天皇は125代にあたる。ただ、万世一系か否かは即断できない。ニニギから神武天皇までの系譜は血統として繋がっているようだが、あくまでも神話の話であり、いくつかの大陸系民族間の列島における武力闘争の勝者の系譜と見るべきであろう。さらに、「人代」以降の古代の皇位継承についても、土着の指導者層と渡来系部族間

の争いあるいは古くからの渡来系と新参者との渡来系同士の覇権争いにおける勝者の系譜と見るべきかもしれない⁵⁾。もっと言えば、易姓革命⁶⁾というべき政権交代が起こっていたことであろう。少なくとも応神天皇(15代)までは、父から子へと皇位継承が行われたことにはいるが、宝算(天皇の年齢)が長すぎる。神武天皇127歳、考安天皇(6代)137歳、崇神天皇(10代)120歳、垂仁天皇(11代)140歳、応神天皇(15代)110歳で宝算が100歳を超える天皇は他にもいる。このことは、例えば、神武天皇(カムタマトイワレヒコ)を首領とする天孫族の支配が127年続いたということではなからうか。仁徳天皇(16代、倭の五王⁷⁾ 讃または珍:5世紀前半)は応神天皇の第四子とされ、古事記によれば宝算83歳とされる。仁徳天皇に渡来系の可能性はないのか。図2にみるように仁徳天皇の後継には三人の子が順次皇位についている。履中天皇(17代)と反正天皇(18代)の在位はそれぞれ6年と5年と短い。允恭天皇(19代)になってやっと落ち着き、在位は42年である。以後、皇位継承に関して継体天皇(26代:6世紀前半)が現れるまでは革命的な変化は見られない。

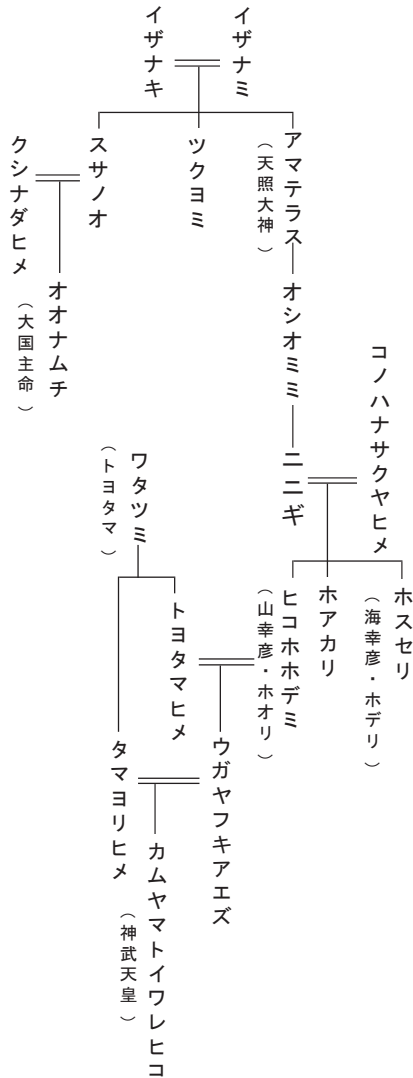


図1 神々の系譜

実在が確実視される継体天皇は応神天皇の5代の孫というだけで、出自が明らかでない。彼もまた渡来系の新たな征服者であるかもしれない(3章参照)。即ち、仁徳王朝(16代仁徳～25代武烈:5世紀末)から継体王朝への易姓革命があったのだろうか。継体天皇は多くの妃を迎えており、彼の三人の子が続いて皇位についたとされる。図3に見るように66歳で即位した第一皇子(安閑天皇:27代、在位:4年)、69歳で即位した第三皇子(宣化天皇:28代、在位:3年)そして第四皇子(欽明天皇:29代、在位:32年)である。27代と28代の天皇の即位は高齢に過ぎる。また、欽明天皇の第二皇子(敏達天皇:30代、在位572～585年)、第四皇子(用明天皇:31代、在位:585～587年)、第十二皇子(崇峻天皇:32代、在位:587～592年)、第三皇女(推古天皇:33代、在位:592～628年)と兄弟妹四代が続けて継承していることになっているが在位36年の推古天皇以外は非常に短命の政権である。熾烈な権力闘争の結果であろうか。しかし、欽明天皇は父子継承ののち、兄弟で皇位継承が行われていることは最早、易姓革命の時代が過ぎたのだろう。

万葉時代、悲劇を被った皇子は数知れない。本稿では、皇位継承に絡んで皇子たちに起きた悲劇の系譜を編年的に見る。即ち、皇子たちの身に起きた悲劇の発端、その経緯と結末、そして主人公たちに関わる詩歌から彼らの人物像を描き、心情を察することとする。ここに、万葉時代は前報³⁾に従って、仁徳天皇が統治した頃から、天平宝字3年(759年)に万葉集⁸⁾の最後に採録された大伴家持の歌、

新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事 (4516番)

が登場する淳仁天皇(47代、在位:758～764)の頃までとする。即ち、神話の雰囲気を多分に含む5世紀前半頃の大和時代(古墳時代)後半から8世紀中葉の奈良時代までの約350年間とする。また、特に断らない限り、書紀にもとづいて記述することとし、歴代天皇の各種データは「歴代天皇総覧」⁹⁾に拠った。そして、万葉集に収録されている和歌には通し番号を付してある。

2. 仁徳天皇の後継者たちの悲劇

万葉時代の皇位継承は、幾つもの血なまぐさい王権争奪劇が展開している。本章では、図2に示す万葉時代初期の仁徳天皇から武烈天皇までの時代に生まれた悲劇の皇子たちの興味深い人間模様を通観する。仁徳天皇には、

- ①皇后磐姫との間に三人の天皇となった皇子たちがおり、第一皇子は履中天皇(17代)、第三皇子は反正天皇(18代)、そして第四皇子は允恭天皇(19代)と順に皇位を継承している。
- ②また、日向髪長媛との間に大草香皇子と幡梭皇女がおり、大草香皇子の子を眉輪王^{まよわのおおきみ}という。

悲劇は仁徳天皇の子や孫たちに起こる。編年的には、允恭天皇（19代：5世紀中頃）の子ども達四人、即ち、木梨軽皇子、軽大娘皇女、境黒彦皇子、八鈞白彦皇子に悲劇が起こる。そして、悲劇は大草香皇子と眉輪王親子を続いて襲い、履中天皇（17代）の子市辺忍衛王に及ぶ。木梨軽皇子と軽大娘皇女兄妹の姦通事件以外の悲劇は允恭天皇の第五子大泊瀬稚武皇子（以下ワカタケル：後の雄略天皇：5世紀後半）が起こしている。

2.1 木梨軽皇子の悲劇

允恭天皇には9人の皇子と皇女たちがいるが図2には悲劇に関わる6人のみを挙げてある。即ち、木梨軽皇子、境黒彦皇子、穴穂皇子、軽大娘皇女、八鈞白彦皇子、ワカタケルである。先ず、皇太子であった木梨軽皇子と同母妹の軽大娘皇女が犯した社会的・倫理的に許されない近親相姦の事件から稿を起す。軽大娘皇女は、美しい肌の色つやが衣を通して光り輝くとして衣通郎女¹⁰と呼ばれる美女であった。書紀の允恭天皇の項には、「木梨軽皇子を立てて太子としたまふ 容姿佳麗しくして 見る者 自ずから感づ同母妹軽大娘皇女 亦艶妙なり 太子 恒に大娘皇女に合せむと念し 罪有らむことを畏りて 黙したまふ」とあり、木梨軽皇子は美しい妹軽大娘皇女と結婚したいと思っていたが、罪になることを恐れて黙っていた。しかし恋慕の情が溢れ、苦しくて死にそうになった。そこで、「徒空に死せむよりは 罪有り」と雖も何ぞ忍ぶること得むや」と思うに至って、姦通してしまう。それで、木梨軽皇子の煩悶は少し収まり、詠んだ歌が古事記にある。

あしひきの 山田を作り 山高み 下樋を走しせ 下泣きに
我が泣く妻片泣きに 我が泣く妻 昨夜こそ 安く膚触れ

「山田を作り 山が高いので下樋を通して水を引く 地中に通すその下樋のように 私が人知れず忍び泣きして恋う妻よ 私が半泣きして慕う妻よ 昨夜こそ心安らかにその肌に触れたことよ。」

事が露見したのち、允恭政権が執った二人への処置が書紀と古事記では内容が異なる。書紀では軽大娘皇女だけが伊予（道後温泉）に流されたとあるが、古事記によると配流されたのは木梨軽皇子の方でその内容も詳しい。木梨軽皇子は皇太子を廃され、伊予の湯に流された。その時、詠んだ歌が、

空飛ぶ鳥も使そ 鶴が音の聞む時は我が名問はさね

「空飛ぶ鳥も言通わす使いなのだ 鶴の声が聞こえるときは 私の名を言つて私のことをお尋ね下さい。」 一方、軽大娘皇女も流された兄への恋慕に堪えず後を追ひ、詠んだという歌が万葉集に採録されている。

君が住き日長くなりぬ造木の迎えを行かむ待つには待たじ （90番）

「あなたがお出かけになってから日数も長くなりました 迎えに行きましょ

うか これ以上待ちません。」造木(山たづ)は迎えの枕詞。結局、愛しあった実の兄妹はともに自害する。異母兄妹やいとこ同士の婚姻は許され、数多

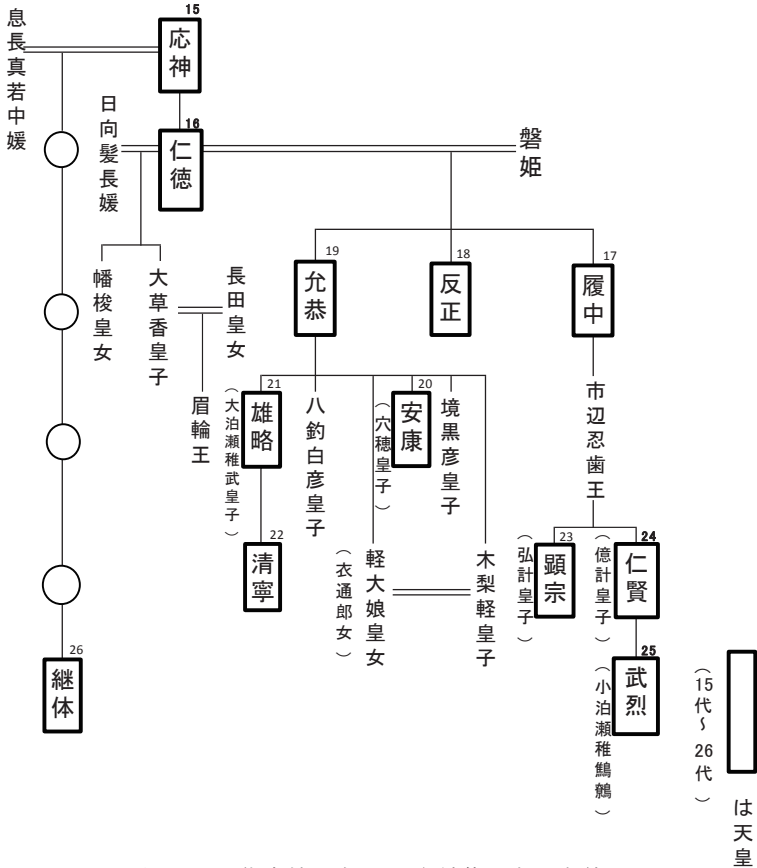


図2 15代心神天皇～26代継体天皇の皇統

くのカップルが見られるが、さすがに同母兄妹の婚姻は許されなかった。木梨軽皇子は同母の妹を愛してしまったために自死に至った悲劇の皇子である。

2.2 大草香皇子・白彦皇子・黒彦皇子・眉輪王の悲劇

仁徳天皇は、別に日向髪長媛との間に大草香皇子と幡梭皇女をもうけている。この兄妹の存在が多くの悲劇の皇子たちを生む引き金となるのである。

皇太子であった兄木梨輕皇太子の姦通事件を受けて、弟穴穗皇子が安康天皇（20代）として即位した。この安康天皇が、弟で第五子ワカタケルの妃として叔父大草香皇子の妹幡梭皇女を貰い受けようと思い、「願わくは幡梭皇女を得て大泊瀬皇子に配せむ」と言って、使者根使主を叔父に送ったことが本節で述べる4人の皇子たちに起きた悲劇の発端である。

根使主を通じて妹幡梭皇女とワカタケルの婚姻話を安康天皇から賜った大草香皇子は、大いに喜びかつ恐縮して、「・・・大恩なり・・・故丹心を呈さむと欲ひ私の宝名は押木珠纒といふを捧げて・・・願はくは物軽く賤しと雖も納めて信契としたまはむことを」と快諾して、その証に玉飾りのある「押木珠纒」という銘の美しい冠を安康天皇に奉獻した。ところが、使いの根使主は奉獻された冠があまりに美しかったので盗み取って自分のものにしてしまう。尚且つ、安康天皇には大草香皇子が、「其れ同族と謂えども豈吾が妹を以ちて妻とすること得むや」と言っておりましてと嘘の奏上をした。安康天皇は大草香皇子が奉獻した玉纒を根使主が横取りした上に讒言したことに気付かなかった。果たして安康天皇は、根使主を信じて、けしからん叔父だということで大草香皇子を誅殺してしまう。そればかりか、大草香皇子の妃であった長田皇女を自らの皇后にしてしまった。理不尽な悲劇を被った大草香皇子はワカタケルに関わる悲劇の皇子の一人目である。更に、事件は起こった。大草香皇子の子で7歳の眉輪王は安康天皇と皇后となった母との会話、「吾妹（妻のこと）汝はむつましと雖も朕は眉輪王を畏る」を偶然聞き、我が父大草香皇子を殺し、我が母を奪った人物が安康天皇であることを知ってしまう。そして、彼は報復として安康天皇の寝首を切って殺害してしまった。

少年の犯罪を知ったワカタケルは、兄安康天皇の殺害が皇位を狙う第二皇子の八鈞白彦皇子と第四皇子の境黒彦皇子の二人の兄の仕業ではないかと疑い武装した。先ず、白彦皇子に詰問したがが黙座して何も語らなかったのものでその場で殺害してしまう。次に、黒彦皇子を詰問したが彼もまた身の危険を察して何も語らなかった。更に、ワカタケルが眉輪王に安康天皇を殺害した理由を詰問したところ、「臣元より天位を求むるにあらず唯父の仇を報ゆるくのみ」と答えた。黒彦皇子と眉輪王は凶暴なワカタケルを恐れるあまり、反ワカタケル派の円大臣の邸に逃げ込んだ。怒ったワカタケルは軍勢を遣って円大臣の邸を取り囲み、火を点けたため、黒彦皇子は眉輪王とともに焼き殺されてしまう。黒彦皇子と白彦皇子の二人はワカタケルによる二人目と三人目の、眉輪王は四人目の悲劇の皇子である。彼らはワカタケルが皇位継承を狙って実行した暗殺の被害者であろう。結局、ワカタケルは雄略天皇（21代：倭の五王の武）として即位し、兄安康天皇の願い通りに大草香皇

子の妹幡梭皇女を娶っている。

その後、悲劇の元となった根使主の悪行は暴かれることになる。ワカタケルの皇后となった幡梭皇女は、根使主が堂々と被っている玉纒を見て、「・・・穴穂天皇の勅を奉りて妾を陛下に進りし時に妾が為に献れる物なり」と言って泣いたため、根使主の窃盗と讒言が暴かれ、彼はワカタケルに殺されている。

2.3 忍齒王の悲劇

ワカタケルは更に悲劇の皇子を生んでいる。履中天皇（17代）の子市辺忍齒王とワカタケルはいとこ同士でもにも有力な皇位継承者であった（図2参照）。ワカタケルは兄安康天皇が忍齒王に皇位を継承させようとしていたことを知って彼を恨んでいた。それで、「今し近江の来田綿の蚊屋野に猪・鹿多にあり其の戴ける角 枯樹の末に類へり 其の聚へる脚 弱木の林の如し 呼吸く氣息 朝霧に似れり」と偽って忍齒王を狩場に連れ出して殺害している。書紀の雄略天皇の項では、狩猟の最中、ワカタケルは弓を引き絞りながら馬を走らせ、大声で「猪有り」と叫んで忍齒王を射殺したとある。古事記では凶行に至る経過が詳しい。ワカタケルと忍齒王は近江の狩場に行幸して、別々の仮宮で野営した。翌早朝、忍齒王が馬に乗って、ワカタケルの仮宮を訪れ、「未だ寤めず坐す 早く白すべし 夜は既に曙け訖りぬ 獨庭に幸すべし」と伝えてくれとワカタケルの従者に告げて、先に出発した。すると、従者はワカタケルに、「うたて物云ふ王子ぞ故 慎むべし 亦 御身を堅むべし」と申し上げた。ワカタケルは即座に甲冑で身を固め、忍齒王に迫りついて射落とし、残酷にも遺体を切り刻んで飼葉桶に入れてしまった。忍齒王はワカタケルによる五人目の悲劇の皇子である。

なお、昭和53年（1978年）、埼玉稲荷山古墳から出土した鉄剣に金象嵌された文字「獲加多支箇」はワカタケルと比定されている。このことは5世紀前半の雄略政権下では全国平定のために鉄を輸入して韓鍛冶（やまと王権に仕えた渡来系の鍛冶集団）に武具や馬具を製作させていたことを示している。また、この時代は大陸から多くの技術者とともに最新の文化・技術・資源を輸入しているので、明治維新に相当する富国強兵の「万葉維新」の時代であるといっても過言ではない。残酷なワカタケルではあるが彼が詠った求婚の歌が万葉集の冒頭に採録されている^{3, 8)}。

籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この岳に 菜摘ます 児
家聞かな 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて われ
こそ居れ しきなべて われこそ座せ われこそは 告らめ 家を
も名をも (1番)

2.4 億計皇子と弘計皇子の場合

前節の悲劇には素晴らしい続きがある。古事記によるとワカタケルに殺された忍齒王には二人の子がいた。億計（以下オケ）皇子と弘計（以下ヲケ）皇子である。彼らもワカタケルが主催した来田綿の狩りに随行していた。父の異変を知った兄弟は、急遽、その場を離れ逃げて播磨国に至り、身分を隠して馬飼い・牛飼いの牧童となって暮っていた。

さて、障害となる皇位継承候補者を一掃して皇位に就いたワカタケルが病没する。ワカタケルの第三皇子白髪皇子は生まれながら白髪であったため、それを靈妙な兆しと認められ清寧天皇（22代）として即位し後継となった。しかし、清寧天皇には皇后もいないし、子もなかったので御名代として天皇の名にちなんで白髪部を定めていた¹¹⁾。古事記によると清寧天皇が崩御すると大和政権は皇位継承者を求めて忍齒王の妹である忍海郎女（飯豊王）を葛城の忍海の高木角刺宮に迎えている。

この時代、地方官が各国に派遣され、その地の行政に当たっていた。播磨国に派遣された山部連小楯という地方官が、たまたま、ある邸の新築祝いの酒宴に出くわした。そこでは今まさに宴たけなわで貴賤長幼の順に舞を舞って盛り上がっていた。そのうち、火を焚く役目の少年二人にも舞わせようということになった。二人は「汝兄 先ず舞へ」、「汝弟 先ず舞へ」と順番を譲り合ったが、結局、兄が先に舞った。オケである。次いで弟のヲケが舞う段になったとき、踊りだす前に、「・・・天の下を 治め賜へる 伊耶本和氣天皇の 御子市辺之 押齒王之 奴末（・・・天下をお治めになった履中天皇の御子 御子市辺之押齒王之 今は奴となった子孫の私です）」と詠って身分を明かした。これを聞いた山部連小楯は驚き、慌てて床から転げ落ちた。即刻、オケとヲケの二人の皇子が見つかりましたと馭馬の使者を都に送った。知らせを受けた叔母の忍海郎女は飲んで角刺宮に二人を上らせた。こうして救出された兄弟はともに皇位に就いた。このときも即位の順番を譲り合い、弟のヲケが先に顕宗天皇（23代）として即位し、次いで兄のオケが仁賢天皇（24代）として即位した。兄弟が後先を譲りあった珍しく美しい皇位継承劇である。父を殺されながらも悲劇を免れた皇子たちである。以上は古事記の記載であるが、このストーリーは書紀では少し異なる。山部連小楯が清寧天皇の即位後の最初に行われる新嘗祭に奉る供物の料のために播磨の国に行ったとき、オケとヲケを見つけた。馭使を貢上って奏上したところ、天皇は驚き嘆かれたが、哀れにも思って、「懿しきかも 悦しきかも 天溥きなる愛を垂れたたまひ 賜ふに両児を以ちてせり」と語った。書紀では清寧天皇はまだ崩御していない。

2.5 歌垣

少し横道に逸れるが、弟ヲケが志毘臣しびのおみ（以下シビ）なる者と歌垣¹²）でやり取りした歌を味わってみる。古事記によるとヲケが求婚しようとした大魚おうおという名の乙女の手をシビが先に握ったところから歌合戦が始まる。先ず、シビが詠う。

大宮の 彼つ端手 隅傾けり

「皇居のあちら側の端の方は軒の隅が傾いている」と詠って下の句を求めたところ、ヲケは、

大匠 劣みこそ 隅傾けれ

「大工の棟梁一高官である志毘臣一の腕が拙いからこそ、軒の隅が傾いているのだ」と自分がだらしのないのではなく臣であるシビのせいだとシビの無礼を切り返したところ、シビは、

大君の 心を緩むみ 臣の子の 八重の柴垣 入り立たずあり

「大君の心がだらしないので あなたは私の家の幾重にも張り巡らした柴垣の内に入れないでいる」とあなたは私の手中にある一柴垣の内うちに囲っている一乙女大魚を手に入れられないだろうよと詠った。これにまたヲケは返して、

潮瀬の 波折りを 見れば 遊び来る 鮪が端手に 妻立てり見ゆ

「海の潮が流れる浅瀬の波が幾重にも立ったあたりを見ると泳いできた鮪しびのひれの端に妻がいるのが見える」とお前の名が志毘しび（古代、マグロをシビといったことに掛けている）というだけあって魚を妻として伴っていると冷やかした。お前の相手としてお似合いなのはその魚の方で、乙女の名の「大魚おうお」ではないとの意で詠うとシビはますます怒って、

大君の 御子の柴垣 八節縛り 縛り廻し 切れむ柴垣 焼けむ柴垣

「大君の御子の柴垣は 結び目が多くしっかりと縛り廻らしてはいるが やがて綱が切れてしまいうらう柴垣 火事で焼けてしまいうらう柴垣よ。」

そして、ヲケが返して詠うには、

大魚よし 鮪突く海人よ 其が離れば 心恋しけむ 鮪突く 志毘

「大きな魚よし マグロを銚しで突く海人あま（シビ）よ その乙女がお前を拒絶して遠く離れて去ってしまったら お前はさぞ恋しく思うだろう シビ（マグロ）突くシビよ」とシビの負けを前提とした詠い方をして相手を揶揄している。このように競って詠い合い夜を明かしている。

上の歌垣は書紀によると、オケの子小泊瀬稚鷦鷯をばつせわかさぎ皇子（以下ワカサザキ：武烈天皇 25 代）が皇太子であった頃、権力者の大臣平群真鳥おおおみへぐりまるとりの子男鮪こしび（以下コシビ）と交わした歌合戦に変わる。ワカサザキの父は仁賢天皇（オケ）であり、母は雄略天皇の娘の春日大郎女皇后かすがのおほいらつめである。ワカサザキは祖父ワカタケルに勝るとも劣らぬ残酷な人であった。ワカサザキは物部鹿鹿火大連あらかいひのおおむらじの子

影媛を娶ろうとしたが彼女はすでにコシビと通じていた。それを知らないワカサザキは海石櫛市の巷での歌垣に参加して、影媛の袖を引いて誘ったところ、コシビが中に割って入った。

ワカサザキはコシビに向かって詠う。

潮瀬の波折を見れば泳びくる鮪が鱧手に妻立てり見ゆ

「潮の流れの早い瀬の幾重にも折り重なる波を見ると泳いでいる鮪（マグロ）の傍らに私と契った妻が立っているのが見える。」

コシビはワカサザキに返歌して、

臣の子の八重や韓垣ゆるせとや御子

「臣の子の家の幾重にも厳重に囲った韓垣の内に影媛を囲っているのですがそれを緩めて影姫をどうぞと差し出せというのですか太子よ。」

ワカサザキはコシビを脅して返歌する。

大太刀を垂れはき立ちて抜かずとも末果しても会はむとぞ思ふ

「大きな太刀を腰に垂し持って立っているが今は抜かなくても将来はきっとこの太刀で戦い力づくでも影媛と会おうと思う。」

コシビがワカサザキに食い下がり、

大君の八重の組垣懸かめども汝を編ましじみ懸かぬ組垣

「大君の家の幾重もの組垣を編んでやろうにもお前は組垣が気に入らないだろうから、組垣は編んでやらない。」

ワカサザキは負けないでコシビへ返歌する。

臣の子の八節の柴垣下動み地震が揺り来ば破れむ柴垣

「臣の子の家の編目の多い立派な柴垣も地が動き地震が来たなら壊れてしまう柴垣だ。」

次いで、ワカサザキが影姫に向かって詠う。

琴頭に来居る影姫玉ならば我が欲る玉の鯨白玉

「琴を奏でるとその音に引かれて神が影となって寄り来るというその影姫は玉にたとえるなら私の欲しい玉であるアワビの真珠のようだ。」

コシビは決然と影姫に代わって返歌した。

大君の御帯の倭文織結び垂れ誰やし人も相思はなくに

「大君の御帯の倭文織の布が（神に祈るときに供える幣のように）結び垂れていますがその誰にも私は思いを寄せてなどおりません思うのは鮪臣（コシビ）のみです。」

ここまでは、オケとシビの歌の読み交わしとよく似たやり取りだが、結末が異なる。遂に、ワカサザキはコシビと影姫が通じていることを悟り、怒ってその夜に乃楽山でコシビを殺してしまう。更にその後、コシビの父平群真鳥大臣を含む一族もワカサザキによって殺戮されてしまう。書紀に載る武烈天

皇の暴虐ぶりは、妊婦の腹を切り裂き胎児を見るなど多くは嗜虐的である。

本章に登場した悲劇の皇子を整理しておく。先ずは、近親相姦をして皇太子を廃され自害した木梨軽皇子と軽大郎女皇女の兄妹である。次いで、讒言を信じた安康天皇によって殺された大草香皇子と眉輪王の親子である。さらにワカタケル（雄略天皇）によって白彦皇子は斬殺され、黒彦皇子は焼き殺されている。ワカタケルは皇位継承に絡めて、履中天皇の皇子忍歯王も矢で射ぬいている。しかし美しい話もあった。忍歯王のオケ皇子とヲケ皇子は難を逃れて、後に、弟ヲケは顕宗天皇（23代）となり、兄オケが仁賢天皇（24代）として即位している。

3. 蘇我氏の勢力下で生まれた悲劇の皇子たち

継体天皇（26代）は、応神天皇（15代）の五代の孫とされ近江国から現れたが、それ以前の皇統との血縁関係がよく分からない。58歳で即位し、河内国樟葉宮（大阪府枚方市）で即位するが大和に入るのは約20年後とある。当時流動化していた朝鮮半島から新しく列島に渡来して誕生した政権なのかも知れない。列島内で易姓革命を含む何らかの騒乱があったのだろうか。継体政権下、北九州で、新羅と内通したと考えられる磐井の反乱¹³⁾が起きているのもこの政権の成立に関連するのかどうか。神武天皇に始まる神話の時代から続く万世一系の皇統に疑問符が付くのも仕方がない。ともあれ、継体天皇からの皇統が現在に続いている。本章では26代継体天皇から33代推古天皇の時代に起こった政争とそれによって生まれた悲劇の皇子たちを見る。

3.1 蘇我氏と物部氏の確執

継体天皇の子どもは図3に示す皇統図のように、安閑天皇（第一皇子、27代）、宣化天皇（第三皇子、28代）、欽明天皇（第四皇子、29代、在位：～571年）が順次即位して皇位を継承している。この時代の悲劇の皇子は欽明天皇の皇統に生まれている。欽明天皇には20人を超す皇子と皇女がいるが皇統図では悲劇等に関わる6人のみを示した。

- ①先ず、皇后石姫（宣化天皇の皇女）との間に詛語田淳中倉太珠敷皇子（敏達天皇：30代）をもうけている。
- ②次に、蘇我稲目の子堅塩媛との間に大兄皇子（用明天皇：31代）と額田部皇女（豊御食炊屋姫：推古天皇：33代）をもうけ、
- ③さらに、堅塩媛の妹小姉君との間に泊瀬部皇子（崇峻天皇：32代）、穴穂部皇子、穴穂部間皇女をもうけている。

まとめると、欽明天皇の子ども達は、ほぼ年齢の順に即位して、敏達（30代、在位：572?～585年）、用明（31代、在位：585～587年）、崇峻（32代、在位：587～592年）、そして推古天皇（33代、在位：592～628年）と四代続くのである。我が国初の女帝である推古天皇以外は在位期間が非常に短いことから、いずれも安定な政権が樹立されなかったようだ。兄弟による激しい権力闘争が展開されたのだろうか。この6世紀末から7世紀前半まで、即ち、推古天皇が592年に豊浦宮とほらのみやで即位してから、持統天皇の藤原京を経て、710年に43代元明天皇が平城京へ移るまでの約100年間を飛鳥時代と呼ぶ。この時代は単に日本の一時代というだけでなく、我が国の生活・習慣の基礎が成立した時代であり、将に、「日本」が誕生した時代と言える¹⁴。

ここで、改めて図3の皇統図を見る。欽明天皇の二人の妃¹⁵）堅塩媛きたしひめとおおの君おおのとはともに蘇我稲目の娘であるから、蘇我氏の血を引いていないのは皇后石姫いしのひめとの間に生まれた敏達天皇だけである。その敏達天皇の皇后は息長真手王¹⁶）の娘で広姫ひろひめといい非蘇我系の皇位継承者である押坂彦人大兄皇子をもうけているが、彼の活動の記録は残されていない。そのため、押坂彦人大兄皇子は蘇我氏によって暗殺されたとも、彼の正体は蘇我馬子ではないかとも言われている。もし、暗殺されたのであれば悲劇の皇子の一人に加わる。押坂彦人大兄皇子の第一子田村皇子たむらのみこは舒明天皇（34代）、孫の軽皇子は孝徳天皇（36代）、中大兄皇子おほあまと大海人皇子あまはそれぞれ、天智天皇（38代）と天武天皇（39代）となっていることから、彼は歴史上非常に重要な人物である。

ここに、欽明政権下では大連¹⁷）は伴金村とものおこしと物部尾輿おのおみであり、大臣¹⁸）は蘇我稲目である。この時代に百濟から仏教が公伝している。書紀によれば、欽明13年（552年）、百濟の聖明王せいめいおうは臣の立場で使いを遣して、「是の法は諸法の中に最も殊勝にます解り難く入り難し・・・能く無量無辺福徳果報を生し乃至は無上の菩提を成弁す・・・百濟王臣明謹みて・・・帝国に伝え奉りて、畿内に流通せしめむ・・・」と奏上したところ、欽明天皇が「朕昔より来未だ曾て是の如く微妙の法を聞くことを得ず然はあれど朕自らは決まじ」と言って、「西蕃の献れる仏の相貌端嚴にして全く未だ曾て看ず礼ふべきや以不や」と群臣に問うたのが崇仏廢仏論争の発端である。大臣蘇我稲目は「西蕃の諸国一に皆礼ふ豊秋日本豈独り育かむや」と崇仏を奏した。一方、大連物部尾輿は、「我が国家の天下に王とましますは恒に天地社稷の百八十神を以ちて春夏秋冬祭擇りたまふことを事とす方今し改めて蕃を擇みたまはば恐るらくは国神の怒りを致したまはむ」と廢仏を主張した。勢力争いに絡めた蘇我氏と物部

氏の戦いが始まる。

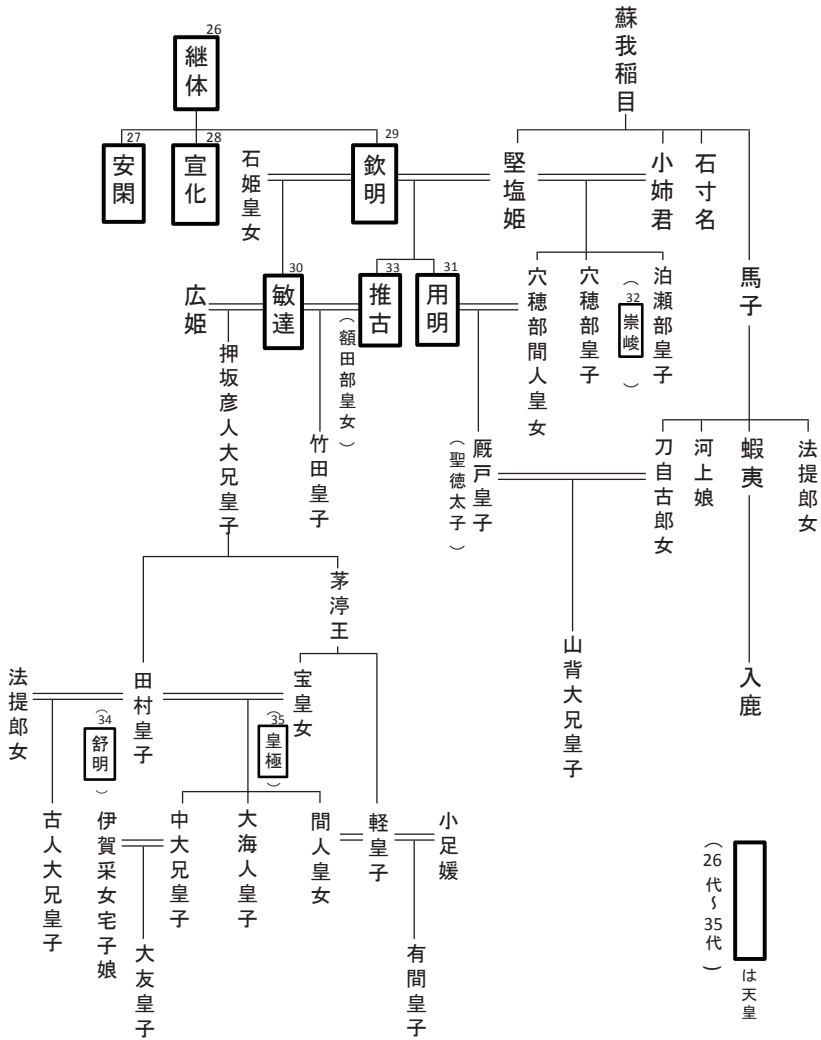


図 3 26代継体天皇～35代皇極天皇の皇統図

3.2 ていび 丁未の乱への序曲

欽明天皇の後継となった非蘇我系の敏達天皇のとき、大臣の蘇我氏は稲目から馬子へ、大連の物部氏は尾輿から守屋へと、それぞれ代替わりしている。敏達天皇が天然痘で亡くなったとき、¹⁹ 殯宮で蘇我馬子が佩刀して¹⁹ 誅を申し述べると物部守屋は大笑いして、「**獵箭中へる雀鳥の如し**（獣を捕るための大きな矢で射られた小さな雀のようだ）」と小柄な蘇我馬子が大刀を帯びたすがたは如何にも不恰好だと言った。次に、物部守屋が手足を振るわせて誅を申し述べると馬子は笑って、「**鈴を懸くべし**」と返した。震える手足に鈴をつけると鈴が鳴るのでこれは滑稽だ。こんなことがあって、いよいよ二人の臣は互いに怨恨を抱くようになる。

敏達天皇は、仏法を熱心に信心することはなく、文学や歴史の方が好きだった。従って、敏達天皇は廃仏派寄り²⁰で物部守屋に近く、蘇我馬子と対立関係にあった。この天皇の御代に有名な逸話がある。高麗からの使者の上表文が黒い鳥羽に書いてあったため誰もが読めないと悩んでいた。そこに王辰爾なる者が現われ、羽根を蒸して布に押し当て、文字を写し取り解説して皆を驚かせたという。

なお、敏達天皇の皇后広姫が薨去したので、敏達天皇の異母妹である額田部皇女（後の推古天皇）が立后している。額田部皇女は皇位継承者として有力な竹田皇子と厩戸皇子の妃となった菟道貝蛸皇女その他を産んでいる。

3.3 はつせべ 泊瀬部皇子と穴穂部皇子の場合

敏達天皇の後継は、蘇我馬子が推す蘇我系堅塩姫が産んだ欽明天皇の第四子が用明天皇（31代：在位 585～587年）として即位した。皇后には堅塩姫の異母妹小姉君の子穴穂部間人皇女が立ち、厩戸皇子（後の聖徳太子）を産んでいる。用明政権でも蘇我馬子が大臣で物部守屋が大連であった。用明天皇は僅か2年の在位で崩御する。用明天皇の後継は押坂彦人大兄皇子と竹田皇子の二人が有力であったが、実際には、蘇我稲目の娘小姉君を母とする馬子が推す泊瀬部（以下ハツセベ）皇子と守屋が推す穴穂部（以下アナホベ）皇子の兄弟が後継候補となった。これにより蘇我氏と物部氏による以下に述べる皇位継承に関わる崇仏廃仏論争に絡めた権力争いに発展する。

このような状況下で、あろうことか強く後継を狙っていた弟アナホベ皇子が、先帝敏達天皇の皇后であった額田部皇女を奸そう²¹と思い殯宮に押し入ろうとする事件が起こった。しかし、敏達天皇の寵臣であった²²三輪君逆が兵衛に命じてアナホベ皇子の乱入を阻止させた。アナホベ皇子はそれに憤慨して、「何の故にか死ぎたまひし王の庭に事へまつりて 生ける王の所に事へまつらざらむ（どうして亡くなられた王[敏達天皇]の所に仕えて 生き

ている王[私、アナホベ皇子]の所には仕えないのか」と言い放ち、大連物部守屋に、「汝^{いまし}往^いきて 逆^{さか}君^{のきみ}併^{あわ}せて其^{ふたりのこ}の二子^ごを討^うつべし（お前が行って逆君と二人の子を討て）」と命じたので大連は軍兵を率いて三輪君逆を討った。一説にはアナホベ自身が射殺したという。

事態を聞き知った大臣蘇我馬子は、「天下^{あめのした}の乱^{みだれ} 久^{ひさ}からじ（天下が乱れるのもそう遠くはないだろう）」と語り、大連物部守屋はそれを聞いて、「汝^{いまし}小^こ臣^{まへつみ}が識^しらざる所^しなり（お前のような小臣の知ったことではない）」と言い放っている。その後、用明天皇も痘瘡（天然痘）に罹ってしまった。崩御の前に、「朕^{われ} 三^よ宝^{ほう}に帰^{かへ}らむと思^{おも}ふ、卿^{きみ}等^らはかれ（私は仏に帰依しようと思うお前たちはこれを協議せよ）」と言った。物部守屋は「何^{なん}ぞ国^{くに}神^{かみ}を背^{そむ}きて 他^{あたし}神^{かみ}を敬^{あが}びむ 由^ゆ来^き 斯^しの若^{わか}き事^{こと}を識^しらず（どうして国神に背いて 他神を敬われるのか 今までこのようなことは聞いたことがない）」と反対した。一方、蘇我馬子は「詔^{みこと}の随^{まにま}に助^{まっ}け奉^{まつ}るべし 詎^{たれ}か異^{いは}なる 計^けを生^はかむ（詔に従ってお助けするべきだ 誰がこれに異議などあろうか）」と崇仏の意見を述べた。

遂に用明天皇が在位1年余りで崩御してしまう。物部守屋は用明天皇の後継としてアナホベ皇子の擁立を図って軍勢を起こしたが、陰謀が漏れてアナホベ皇子は蘇我馬子軍に斬殺されている。愛欲と権力欲の果てではあるが臣下によって皇族が殺された悲劇の皇子である。さらに、蘇我馬子軍は額田部皇女やハツセベ皇子、竹田皇子、厩戸皇子らを味方に引き入れ、軍旅を率いて、苦戦の末に物部守屋軍を打ち滅ぼしたので崇仏廃仏論争は決着して蘇我氏の栄華が始まった。この蘇我馬子と物部守屋の戦いは「丁未の乱」といわれる。この乱の後、蘇我馬子が推すハツセベ皇子が崇峻天皇（32代、在位：587～592年）として即位している。

崇峻天皇は蘇我馬子が政治の実権を握っており、その専横ぶりを憤り、遂には反馬子となっていた。崇峻天皇は献上された猪を指さし、「何^{いづれ}の時に 此^この猪^{いのしし}の頸^{くび}を断^きつが如^{ごと}く 朕^{わが}が嫌^{いと}しむる人^{ひと}を断^きたむ」と詔して多くの武器を準備した。これを知った蘇我馬子は崇峻5年（592年）、天皇を弑殺させた。結局、蘇我馬子は自分の外孫であるハツセベとアナホベの二人の皇子とも殺めてしまったのである。馬子恐るべし。

蘇我氏は、稲目に始まり、馬子、蝦夷、入鹿と続くが、馬子は敏達（30代）・用明（31代）・崇峻（32代）・推古（33代）天皇の四代に仕えている。蘇我氏は下記のように閥閥を形成して全盛時代を築いた²⁰）。

①稲目の三人の子堅塩媛^{きたしひめ}と小姉君^{をあねのきみ}は欽明天皇（29代）の妃、石寸名^{いしき}は用明天皇の嬪^{ひん}¹⁵）（図3参照）、

②馬子の三人の子河上^{かはかみのいらつめ} 娘^{むすめ}は崇峻天皇妃、刀自古郎女^{とじこのいらつめ}は厩戸皇子の妃、法提郎女^{ほていのいらつめ}は舒明天皇（34代：田村皇子）の皇后（図3参照）、

- ③馬子の孫蘇我倉山田石川麻呂の子の乳娘ちちのいらつめ（図4参照）は孝徳天皇（36代）妃であり、遠智娘をちのいらつめと姪娘めいひのいらつめは天智天皇（38代）嬪（図5参照）、
④そして蘇我倉山田石川麻呂の弟蘇我赤兄あかえの子常陸娘ひたちのいらつめ（図5参照）は天智天皇嬪となっている。

崇峻天皇が蘇我馬子に殺された直後には、次期天皇として擁立しうる皇子は押坂彦人大兄皇子、竹田皇子、厩戸皇子たちがいて（図3参照）、その資格は伯仲していた。蘇我馬子は後継者として大切な皇子たちをむやみに権力闘争で失わないためという理由で、敏達天皇の皇后だった額田部皇女を豊浦宮で即位させ、推古天皇（33代、在位：592～628年）が誕生した。翌年、推古天皇の甥厩戸皇子を皇太子に立て、摂政として国政に参画させた。ただし、この時代には皇太子や摂政の制度は未だなく、これらの地位が成立するのは約100年後に定められた飛鳥浄御原令であることを付け加えておく。

3.4 推古天皇—蘇我馬子ライン

書紀の推古天皇の項に、推古20年の春、小治田宮²¹⁾で正月、推古天皇が群卿に酒をふるまわれたとき、蘇我馬子は、

やすみしし 我が大君の 隠ります 天の八十陸 出で立たす
み空を見れば万代に かくしもがも 千代にも かくしもがも
畏みて仕へ奉らむ 擇みて 仕へまつらむ 歌づきまつる

「我が大君がお休みになる広々とした宮殿 又 お出ましになる御空を見ますと 千代も万代もこのように立派であって欲しいものです 私どもは畏み崇めてお仕え申し上げます この祝い歌を献上いたします」と天皇を褒め讃える歌を献上している。これに和して、推古天皇は、

真蘇我よ 蘇我の子らは 馬ならば日向の駒 太刀ならば
呉の真刀 諾しかも 蘇我の子らを 大君の使はすらしき

「真蘇我よ 蘇我的人々は 馬でいえば日向の良馬 太刀でいえば呉の利剣だ だから蘇我的人々を大君の私がお使いになるのはもっともなことだ。」このように蘇我氏と天皇家は協調関係にあり、推古—馬子ラインは強力で、同じく蘇我系ではあるが厩戸皇子は弾かれる存在であった。

3.5 厩戸皇子（聖徳太子）の悲劇の皇子

- 推古天皇は36年間も在位したので、用明天皇の子厩戸皇子は摂政として、
①一切の政務を執り行い、国政をすべて委任され、
②我が国初の丈六の金銅仏を仏師鞍作鳥くらつくりのとりに造らせて元興寺に安置するなど 仏教の興隆に努め、

- ③冠位十二階を施行し、
 ④憲法十七条を作り、
 ⑤遣隋使を派遣した、

などとされるが皇位に就くことはなかった。その理由は、強く皇位を望んだ厩戸皇子が飛鳥の地を離れ斑鳩の地に移り住み、傲慢にも推古天皇のおほりだ宮殿より大きな斑鳩宮²²⁾を造営したことに推古一馬子ラインが反発したのではないか。露骨な皇位への野心が厩戸皇子忌避の原因ではなかったかという²⁰⁾。ともかく聡明過ぎた厩戸皇子は皇位に就くことはなく、推古30年(622年)、49歳で薨去している。これも無血の悲劇ではなからうか。

厩戸皇子が後に聖徳太子と呼ばれる所以の一つが書紀に記述されている。「・・・生まれながらに能く言ひ 聖智有り 壮に及びて 一に十人の訴を聞きて 失たず能く弁たまひ 兼ねて未然を知るしめす 且、内教を高麗の僧慧慈に習ひ 外典を博士覚智に学び 並に 悉に達りたまひぬ・・・(生まれてすぐ言葉を話され 優れた智慧がおありであった 成人なされると 一度に十人の訴えを聞いても 間違いなく聞き分けることがお出来になり さらに先々に事まで見通された 仏教を高麗の僧慧慈に習い、儒教の經典を博士覚智に学んで どちらも悉く習得された。)」

もう一つの逸話がある。厩戸皇子が片岡という処に出かけたとき、道端に人が倒れていた。厩戸皇子が名前をお尋ねになったが返答がなかったので、飲み物と食べ物を与えた。更に、自分の服を脱いで飢えた人に掛けて、歌を詠んだ。

してなる 片岡山に 飯に飢て 臥せる その田人あはれ
 親無しに 汝なりめや さす竹の 君はや無き 飯に飢て
 臥せる その田人あはれ

「片岡山で 飯に飢えて伏せっている その農夫よ ああ 親もなしにお前は生まれてきたわけではあるまい 主君はいないのか 飯に飢えて伏せっているその農夫よ ああ。」翌日、使者を遣って、その人の様子を見に行かせたところ、すでに死んでいたというので、厩戸皇子は大層悲しまれ、その地に埋葬させ、墓を作らせた。後日、再び、使者を遣って、墓を見に行かせたところ、屍骨は無くなっており、厩戸皇子が与えた衣服だけが豊んで棺の上に置いてあった。厩戸皇子はその服を今まで通りに着用したという。このことを人は不思議がって、「聖が聖を知るといのは、本当なのだなあ」と言い、ますます畏んだ。後に、この飢えた人は達磨の化身とされたという。なお、万葉集にもこの事蹟についての聖徳太子の歌が採録されている。

家があれば妹が手まかむ草枕旅に臥せるこの旅人あはれ (415番)

皇太子であった厩戸皇子が亡くなったが次の皇太子を立てないまま、推古36年(628年)、推古天皇が崩御してしまった。推古天皇は生前、二人の皇子を枕元に呼んだ。田村皇子と山背大兄王やましろうのおおえのおうである(図3参照)。先ず、田村皇子が呼ばれ、天皇は、「天下は大任あめのした おほきなるよさしなり本よりもと輒たやすく言ふものに非ずいまし爾あきらか田村皇子 慎おこたみて察にせよ 緩るべからず(天下の統治を委任されることは大業である もとより軽々しく口にするのではない おまえ田村皇子は慎重に考えよ 怠ってはならない)」と諭した。次に、山背大兄王を呼んで、「汝なむぢ 独ひとりり莫な誼と謹よきそ 必ずまへつみみたち群こぞの言に従ひて 慎たがみて違ふこと勿たがれ(お前ひとりでやかましくあれこれ言ってはならない 必ず群臣の言葉に従って 違わないように用心深くふるまえ)」と言ひ聞かせた。さて、二人の皇子に同じような内容を遺言したので推古天皇の本心が分からない。どちらを後継にするかで群臣たちの意見が割れた。蘇我馬子が推古34年に薨逝していたので、蝦夷えみしが大臣を継承しており、推古一馬子ラインは推古一蝦夷ラインになっている。山背大兄王は皇位継承権をもちながら遂に即位せずに逝った父厩戸皇子の遺志を継いで叔父蘇我蝦夷にかなりしつこく自らの皇位継承を懇願した。しかし、蘇我蝦夷は群臣の意見を無視し独断で蘇我氏の血を引いていない田村皇子を後継じよめいに立て、舒明天皇(34代、在位:629~641年)として即位させた。山背大兄の王は蝦夷によって忌避されたのである。舒明天皇は、図3、4に示すように、

- ①皇后は姪の宝皇女(後の皇極・斉明天皇)で、中大兄皇子なかのおおえ(葛城皇子ともいう)、大海人皇子おのおあまの、間人皇女はしひとのひめみこを産んでいる。中大兄皇子は舒明天皇の皇太子になる。
- ②また、蘇我馬子の娘法提郎女ほうていのいらつめは夫人ぶにんとなり、古人大兄皇子ふるひとのおおえのみこを産んでいる。

さて、舒明天皇は、「群まへつみみたち 卿ももつかさと百寮みかどまいり 朝すでに 参すること己おこたに懈れり 今より以後のち 卯うのとぎの始めに朝まゐりて 巳みのときの後に退まかでむ 因よりて鐘さだめを以ちて節さだめとせよ(群卿及び百官は 参朝をすっかり怠っている 今後は 卯時(午前5時)の始めに参朝 巳時(午前9時)の後(午前11時)に退朝させよ そうしてそれを鐘で知らせることを規則とせよ)」と申し渡したが、大臣蘇我蝦夷は全く従わなかった。このように蘇我蝦夷に政治の実権を奪われながらも頑張った舒明天皇は外交面で見べきものがある。舒明2年(630年)、隋(581~619年)が滅んで唐が建ったので大上御田いのかのみたすき鎌さきを大使とする遣唐使を唐に派遣している。舒明12年には、唐から南淵みなぶら請安のしょうあん(23)や高向たかむ玄理のくろまろ(24)が帰国して、大化の改新の政策立案に貢献している。ところで、舒明3年、百濟王ぎ義慈じは、王子ほうしじょう豊章ほうしじょう(または豊璋)を人質として倭に入れている。この王子豊璋については、書紀に突然に出現していることから、後述の「乙巳の乱」を影で主導

した中臣鎌足の実像ではないかとも言われている²⁵⁾。

3.6 山背大兄王の悲劇

舒明天皇は在位 10 年余りで崩御する。後継には、皇后宝皇女が皇極天皇 (35 代：在位 642～645 年) として即位した。大臣は蘇我蝦夷であるが、その子入鹿が政権を掌握して、その権勢は父蝦夷を凌いだ。蝦夷は、蘇我氏おやのみたまの祖廟むらを建てて天皇の場合と同等の舞いを奉納したり、大陵おほみさぎと小陵をみさぎと呼ぶ、蝦夷と入鹿親子の墳丘墓の造営を始めた。このとき、臣下である蘇我氏は皇族である山背大兄皇子の上宮の乳部²⁶⁾の民を使役する暴挙に出た。この蘇我氏の横暴を嘆いて、厩戸皇子の娘でかつ山背大兄皇子の配偶者ともいわれる上宮大娘皇女は、「蘇我臣ふたつのきみ 国政くにのみまつりごとを専きままにして 多おほみさぎに無礼をみさぎき行す。天に二日なく 国に二王無し 何の由にか意こころの任まにまに悉よさに封つかせる民を役はむ」と憤っている。このような恨みを買うほどに閥閥によって権力を握っていた蝦夷と入鹿の親子ではあるが、皇極天皇以来の政治を踏襲しながら百濟大寺を建立するなど推古天皇が始動した仏教興隆に尽くしている。蘇我宗家は横暴だけではなかったのである。

皇極天皇が即位した段階で、次期天皇の候補者 (図 3 参照) には、

- ① 厩戸皇子の子山背大兄王、
- ② 茅渟王ちぬのおおきみの子か軽皇子、
- ③ 田村皇子の子の異母兄弟で兄ふるひとのおおえの古人大兄皇子 (母は法提ほていのいらつめ郎女) と
- ④ 弟の中大兄皇子 (母は宝皇女)

の四人が並んでいた。皇極天皇の皇太子となった中大兄皇子はまだ 16 歳であった。

ここに、蘇我入鹿が暴挙に出た。蘇我氏系の古人大兄皇子を皇極天皇の後継とするために、皇極 2 年 (643)、障害となる山背大兄皇子の斑鳩宮を攻め、一族もろとも滅亡させてしまったのである。廢墟となった斑鳩宮で自刃した山背大兄皇子は悲劇の皇子である。この入鹿の暴挙には、父蝦夷も「噫 入鹿極あ甚だ愚痴あにして専ら暴悪あを行へり (ああ、入鹿は実に愚かで横暴な悪事ばかりを行ったものだ)」と怒り罵っている。山背大兄皇子一族の殲滅は、並立していた軽皇子支持派と古人大兄皇子支持派の共同作戦ではないかともいわれる。このように、同じ蘇我氏系の厩戸皇子と山背大兄皇子父子を蘇我宗家が忌避する理由は親子がともに聡明過ぎたのか、皇位継承への欲望が強く、自己顕示し過ぎたためではなからうか。これで、皇位継承候補者は軽皇子、古人大兄皇子、中大兄皇子の三人となった。次に、悲劇は古人大兄皇子を襲う。

3.7 古人大兄皇子の悲劇

皇極4年(645年)、飛鳥板蓋宮で中大兄皇子や中臣鎌足(百濟王子豊璋?)ら軽皇子派は、「乙巳の変」と呼ばれるクーデターを起こし、蘇我入鹿を殺害した。事変の顛末は以下の通りである。皇極4年(645年)6月12日、中大兄皇子は密かに蘇我入鹿暗殺計画を右大臣蘇我倉山田石川麻呂に打ち明け、三韓の使者が進調する日に朝堂院の正殿で皇極天皇に上表文を読み上げてくれと頼み承を得た。三韓進調の当日、入鹿が大極殿に参内したとき、身に着けている剣は俳優を使って外させ、丸腰で座につかせる。右大臣が上表文を読み上げると同時に飛鳥板蓋宮のすべての門を封鎖。そして中大兄皇子は長槍を取って大極殿の傍らに隠れ、中臣鎌足らは弓矢を取って中大兄皇子を守護した。さて、右大臣は上表文を読み上げ終わろうとしているのに刺客たちが現れないので不安になり、汗みずくになり声を乱す。不審に思った入鹿が、「何の故にか掉ひ戦く」と尋ねると右大臣は、「天皇に近くはべることを恐み 不覚にも汗流づる」と答えた。入鹿の威勢に委縮して刺客が斬りかからないので中大兄皇子が、「咄嗟」と言って飛び出し剣で入鹿の頭や肩を斬りつけた。入鹿は驚いて立ち上がり、「臣罪を知らず(私は何の罪なのか一何をしたというのか!)」と叫んだ。皇極天皇も中大兄皇子に、「作る所を知らず 何事有りつるや」と尋ねている。

この惨劇を目撃した皇位継承の候補者の一人であった古人大兄皇子は私邸に戻り、「韓人(中大兄皇子)鞍作臣(蘇我入鹿)を殺しつ 吾が心痛し」と言っている。入鹿が暗殺されたことを知った父蝦夷は自刃した。閥閥を形成し権力をほしいままにした蘇我氏宗家はこうして滅んでしまった。書紀では蘇我氏宗家は決定的に悪者に描かれているが果たして如何なものであろうか。

乙巳の変を受けて皇極天皇は皇太子の中大兄皇子に譲位の意向を示した。そこで、中大兄皇子が中臣鎌足に相談したところ、「古人大兄は殿下の兄にして軽皇子は殿下の舅なり・・・且く舅を立てて 民の望に答はば 亦可からずや」言って、軽皇子を推薦した。軽皇子は、再三固辞して、「古人大兄は是昔の天皇の所生なり 而してまた年長いたり・・・」と逆に古人大兄皇子を推薦した。蘇我系の法提郎女を母とする古人大兄皇子は蘇我氏宗家が滅亡したので、後ろ盾を失ってしまっていた。そのため、古人大兄皇子は自分自身が中大兄皇子らクーデター派のターゲットの一人として狙われていると判断し、「臣願わくは 出家して吉野に入り 仏道を勤修ひて 天皇を柘け奉むことを」と皇位の継承を固辞し、剃髪して吉野に入って難を逃れた。しかし、古人大兄皇子は謀反を企てたとの密告により異母弟の中大兄皇子が送った兵によって討たれ、悲劇の皇子の一人に加わっている。この古人大兄皇子の吉野への逃避行は後述の大海人皇子の吉野入りの先例となる(4.2.4項参

照)。結局、皇極天皇の後継には軽皇子と中大兄皇子の叔父と甥の二人が残った。

3.8 蘇我宗家滅亡時までの悲劇の皇子たち—まとめ

本章で、挙げた悲劇の皇子たちを整理しておく。欽明天皇（29代）→敏達天皇（30代）→用明天皇（31代）と皇位を継いだ。用明天皇は僅か2年の在位で崩御している。用明天皇の後継は敏達天皇の長子押坂彦人大兄皇子が有力であったが、実際には、欽明天皇の二人の子で蘇我馬子が推す兄ハツセベ皇子と物部守屋が推す弟アナホベ皇子が皇位を争った。アナホベ皇子は蘇我馬子に殺された悲劇の皇子である。ハツセベ皇子は即位して崇峻天皇（32代）となったが蘇我馬子によって弑殺された。後継には、押坂彦人大兄皇子、竹田皇子、厩戸皇子たちがいたが、蘇我馬子は額田部皇女を即位させ推古天皇が誕生した。活動記録がない敏達天皇の子押坂彦人大兄皇子が蘇我氏によって暗殺されたとすると悲劇の皇子に加わる。また、厩戸皇子は遂に皇位に就くことはなく、また子山背大兄王は入鹿によって一族もろとも殲滅させられており、親子ともども悲劇に遭っている。さらに、乙巳の乱で後ろ盾を失った古人大兄皇子は出家して吉野に逃れたが、謀反を企てたとの密告で討たれ、悲劇の皇子の一人に加わっている。

4. 天武・持統天皇が関わる悲劇の皇子たち

本章では、図4に示す皇統の内、主に34代舒明天皇から41代持統天皇までの時代に皇位継承に関わって起こった事件の結果生まれた悲劇の皇子たち、すなわち、有間皇子、大友皇子、大津皇子の三人について詩歌とともに取り上げる。舒明天皇の皇后は姪の宝皇女（皇極・斉明天皇）で三人の子ども、中大兄皇子（天智天皇）、大海人皇子（天武天皇）、そして間人皇女（孝徳天皇の皇后）がいる。宝皇女の弟が軽皇子（孝徳天皇）でその子が有間皇子であり、中大兄皇子の長男が大友皇子である。中大兄皇子の子太田皇女と鸕野讃良（以下サララ）皇女姉妹はともに大海人皇子の妃となり、姉妹の子がそれぞれ、大津皇子と草壁皇子である。

4.1 有間皇子の悲劇

4.1.1 悲劇の背景

乙巳の変の後、皇極天皇は譲位を言い出したが皇太子の中大兄皇子は固辞し、古人大兄皇子は吉野で中大兄皇子に殺害された。そのため、皇極天皇は皇位継承を固辞できなくなった同母弟の軽皇子に譲位して孝徳天皇（36代、

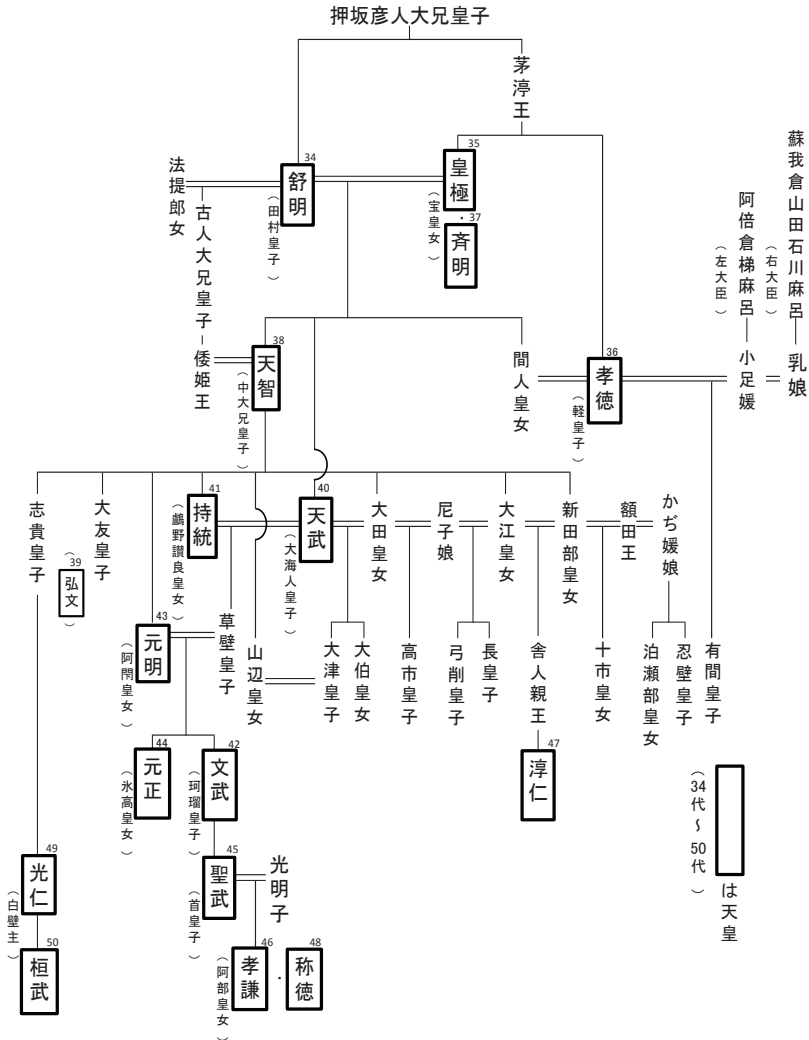


図4 34代舒明天皇～50代桓武天皇の皇統図

在位：645～654年）が誕生した。日本史上初の譲位である。皇太子には引き続き中大兄皇子が就任した。図4に見る孝徳天皇の家族は、

①皇后は中大兄皇子の妹間人皇女である。

- ②妃には軽皇子の即位を推進した左大臣阿倍倉梯麻呂（内麻呂）の子阿倍小足媛あべのをたらしひめが入り、本節の悲劇の主人公の一人有間皇子を産んでいる。
- ③更に、妃として乙巳の変で蘇我入鹿暗殺の合図となる朝鮮使の上表文を読み上げた右大臣蘇我倉山田石川麻呂の子乳娘ちのいらつめが選ばれている。

有間皇子は、皇后はしひと間人皇女の子でなく、孝徳天皇が即位以前の軽皇子と呼ばれていたときに阿倍小足媛あべのおたらしひめとの間に生まれた子であったことが悲劇の発端であり、孝徳天皇が即位したときはわずか6歳であった。

孝徳元年（皇極4年：645年）、初めて元号「大化」を立て、難波長柄豊碕宮なにわのながらのとよさきに遷都している。大化2年には「改新の詔」²⁷⁾を宣して大化の改新と呼ばれる各分野での諸改革を行っている。孝徳政権では、皇太子中大兄皇子と内臣中臣鎌足の二人が政権を掌握しており、中央集権制の確立を目指した改新政治の発定期であった。大化4年、孝徳政権樹立に貢献した左大臣阿倍倉梯麻呂が死んだ。書紀に死因の記載はない。左大臣の死の直後、中大兄皇子は右大臣蘇我倉山田石川麻呂を謀反の讒言によって自殺に追いやっている。二人の重臣の死によって孝徳政権は大きな後ろ盾を失うことになった。後に、中大兄皇子は、右大臣が清廉潔白であることを知り、大いに後悔して嘆き悲しんだというが、彼が皇位継承を含んで孝徳政権の重臣たちを排除したと考えるべきであろう。

白雉4年（653年）、中大兄皇子は孝徳天皇に難波長柄豊碕宮から飛鳥に戻ることを進言する。しかし天皇はそれを拒否したため、中大兄皇子や皇后間人を初め、公卿・百官が飛鳥に遷ってしまう事態に到った。結局、中大兄皇子は孝徳政権の要人暗殺で大化の改新による改革を頓挫させた上、政権機構を奈良に戻ってしまった。このため、蘇我宗家筋が実は改革派であり、中大兄皇子一派はむしろ反動勢力だったので、乙巳の変は政治の革新の正義ではなく単に蘇我宗家を滅ぼすための入鹿暗殺であったのではないかとの見方もある²⁰⁾。そして、蘇我系の孝徳天皇は見捨てられ、政権は瓦解し始める。兄と一緒に飛鳥に戻ってしまった間人皇后への未練を詠った孝徳天皇の歌が書紀にある。

金木かなまき着け吾が飼ふ駒は引き出せず吾が飼ふ駒を人見つらむか

「逃げないように金木を付けて私が飼っている馬 外へ引き出しもせず私が（大事にしまい込んで）飼っている馬を（それなのに）どうして他人は見つけたのだろうか。」 兄妹の中大兄皇子と間人皇女との関係を疑っていたのかもしれない。孤立無援となった天皇は失意と悲嘆の内に翌白雉5年（654年）に在位9年で崩御した。時に悲劇に遭う有間皇子は15歳となっている。

4.1.2 罌に嵌った有間皇子

有力な皇位継承者と見做された有間皇子は継嗣ではあったが、父孝徳天皇が崩御したため、後ろ盾を失い、かつ幼少であったので皇位を継ぐことはなく、叔母皇極天皇が重祚して斉明天皇（37代、在位：655～661年）となった。朝廷を掌握していた28歳の中大兄皇子は、将来、自分のライバルとなるであろう有間皇子を警戒し、疎ましく思っていたと思われる。19歳になっていた有間皇子は中大兄皇子の罌に嵌り、斉明4年（658年）に悲劇が起こる。悲劇の経過は次のようである。

有間皇子は自身が政治的に孤立していることを自覚し、自分に与えられた地位から身の危険を感じて狂人を装っていた。書紀には、「性^{ひととなり} 黠^{まを}くして陽^{いつはり}狂^わす（悪賢い性格で狂人を装った）」とある。斉明4年9月、有間皇子は牟婁温湯（和歌山）に行つて療養して帰つてきたとき、叔母斉明天皇に、「僅かに彼の（素晴らしい）地を見ただけで病は自然に治つてしまいました」と報告した。これを聞いて天皇は喜び、行つてみたいと思われ、11月3日、中大兄皇子とともに牟婁温湯に湯行幸した。

その時、都の留守を預かつた官僚は蘇我馬子の孫の蘇我赤兄である。彼は、天皇一行が和歌山へ出発した将にその日、有間皇子に斉明天皇の政事に誤りがあると唆した。「天皇治らす政事に三失有り、大きな倉庫を起てて民財を積聚む一なり、長く渠水を穿りて、公糧を損費す二つなり、舟に石を載せて、運び積みて丘にす三なり（天皇の政治に三つの過ちがあります。先ず、大きな倉庫を立てて民財を集積した。次に長い渠水を掘つて公の食料を浪費した。さらに船に石を載せて運び、それを積んで丘にしました）」と失政を挙げて有間皇子に謀反を勧めた。蘇我赤兄が述べた内容は、中大兄皇子が実権を握る斉明政権の不人気の尤もな理由で正しい。有間皇子は蘇我赤兄が自分に好意を寄せていることを知り、彼の囁きに喜んで、「吾が年始めて兵を用ゐるべき時なり（私はこの年になってやっと兵を挙げる時が来た）」と答えた。11月5日、有間皇子が蘇我赤兄を信じてその企て話（謀議）に乗つたことを見届けると赤兄は有間皇子の邸を取り囲むとともに駟馬を遣わし、事の次第を斉明天皇に奏上した。11月9日、赤兄は有間皇子を逮捕し、牟婁温湯まで護送して天皇に引き渡した。有間皇子は罌に嵌つたのである。有間皇子は中大兄皇子から「何の故か謀反けむとする」と厳しく尋問され、「天と赤兄と知らむ、吾全ら解らず」と答えた。11日、有間皇子は、飛鳥への帰路、藤白坂に至つて絞首刑となつた。有間皇子が武装蜂起して政権奪取を企てた形跡もあるが、中大兄皇子の謀略に嵌つた被害者と見るべきであろう。事件は11月3日～11日の僅かな日数の内に終わっている。因みに、蘇我赤兄の子常陸娘は、中大兄皇子の嬪となり、次節で述べ

るもう一人の悲劇の皇子である大友皇子の妃となる山辺皇女を産んでいる。

4.1.3 有間皇子の自ら傷みて松が枝を結べる歌二首

有間皇子が逮捕され牟婁温泉へ護送される往路に詠われた歌が万葉集の挽歌の冒頭に採録されている。

磐代の浜松が枝を結び結び真幸くあらばまた還り見む (141番)

「浜松の枝を結び合わせて道中の無事を祈るが もし(幸いにも)命があつて帰路にまた通ることがあれば この松を見たいものだ」と来たるべき運命を予見していたに違いない。当時、和歌山県南部の磐代の峠を越えるときに無事(寿)を祈って磐代の岡の草の葉を結ぶ習慣一草の葉を結び止める行為の中にその人の命が結びこめられるとする古代信仰—があつたのであろう。

家があれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る (142番)

「家にいたなら食器に盛る飯だけれど 草を枕とする旅の身なので椎の葉に握り飯を盛るしかない」と単純に食事の所作を詠っているようではあるが、家に居ればちゃんと食器に盛って神にお供えをして無事を祈るところであるが、旅の途中であるので椎の葉に盛って神に祈ろうと身の安全を神に委ねている。有間皇子の事件にどのように関わったか分からないが、斉明天皇も牟婁温泉に行幸したとき、

君が代もわが代も知るや磐代の岡の草根をいざ結びてな (10番)

「あなたの命も私の命も支配していることよ この磐代の岡の草を さあ結びましょう」と詠っている。

4.1.4 有間皇子を偲ぶ歌

事件は当時の人々にはかなりの衝撃を与えたが、中大兄皇子の存命中は、有間皇子を追悼することは憚られたのであろう。彼への同情と追慕が公然と表せるようになった32年後の持統4年(690年)になって、長忌寸意吉鷹や山上憶良が挽歌を詠っている。

磐代の岸の松が枝結びけむ人は帰りてまた見けむかも (143番)

天翔りあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ (145番)

長忌寸意吉鷹は、「磐代の岸の松の枝を結んだという人は 無事に帰って来てまた見たらどうか」と詠み、山上憶良は、「天空を空高く飛びながら 皇子の魂は松の枝を見ているだろうがそれを人が知る由もない でも松は知っているに違いない」と追悼している。また、43年経った大宝元年(701年)、柿本人麻呂も紀伊国に行ったとき、結び松を見て詠っている。

後見むと君が結べる磐代の子松がうれをまた見けむかも (146番)

「後で見たいと思って あなたの結んだ 磐代の松の末を また見たのら

うか。」また、雑歌の中にも詠われている。
 藤白のみ坂を越ゆと白袴のわが衣手は濡れにけるかも (1675番)
 「(有間皇子の紋殺の地である)藤白の坂を越えようとして 白袴の衣の袖は涙に濡れたことだ。」 事件は歴史となり、有間皇子は後世に語り継がれる悲劇の皇子であったことが覗える。

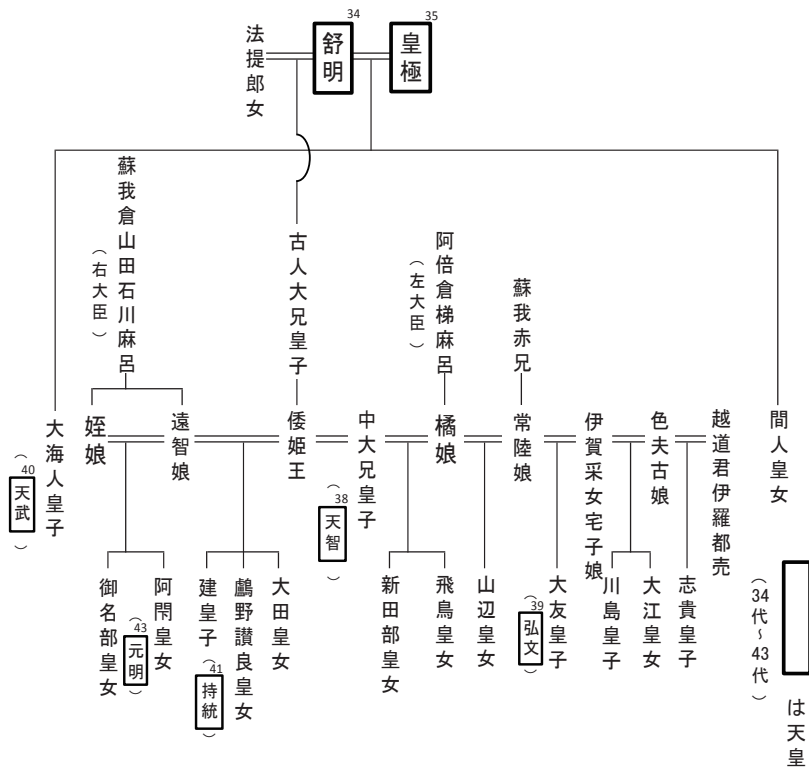


図5 中大兄皇子(天智天皇)の皇后・妃・嬪・宮人

4.2 大友皇子の悲劇

4.2.1 中大兄皇子と大海人皇子の紐帯

万葉時代、最大の内戦となった大友皇子と大海人皇子の間で起こった甥(大友皇子)と叔父(大海人皇子)の戦い「壬申の乱」に至る背景を探ってみる。先ず、乙巳の変で政権を掌握した中大兄皇子(天智天皇)の皇后、嬪、宮人

をまとめる（図4、5参照）。

- ①皇后は異母兄で中大兄皇子に謀反の罪を被せられ吉野で殺された古人大兄皇子の子倭姫王であるが子どもはいなかった。
- ②嬪の蘇我山田石川麻呂の子遠智娘は大田皇女とサララ皇女姉妹そして夭折した建皇子を産んでいる。姉大田皇女は大海人皇子の妃となり伊勢神宮の斎宮となった大伯（または大来）皇女と悲劇に遭う大津皇子の姉弟を産んでいる。妹サララ皇女も大海人皇子の妃となって、草壁皇子を産んでいる。サララ皇女は大海人皇子が天武天皇となったとき皇后となり、天武天皇が崩御したあと、持統天皇として即位している。
- ③遠智娘の妹姪娘も嬪となり阿閉皇女他を産んでいる。阿閉皇女は草壁皇子の妃であり、珂瑠皇子（42代、文武天皇）を産み、後に元明天皇（43代）として即位して藤原京から平城京へ遷都している。
- ④阿倍倉梯麻呂の子橘娘は嬪となり、飛鳥皇女と新田部皇女を産んでいる。新田部皇女は大海人皇子の妃となり日本書紀を編纂した舍人親王（皇子）を産んでいる。
- ⑤蘇我赤兄の子常陸娘も嬪となり、山辺皇女らを産んでいる。山辺皇女は大津皇子の妃となり大津皇子に殉死した。
- ⑥宮人である越道君伊羅都売は万葉歌人として知られる志貴皇子を産んでいる。志貴皇子の孫が平安遷都を敢行した桓武天皇（50代）である。
- ⑦伊賀采女宅子娘も宮人で、中大兄皇子の長子で壬申の乱で自死した悲劇の大友皇子を産んでいる。
- ⑧色夫古娘もまた宮人で大江皇女と川島皇子をもうけている。大江皇女は大海人皇女の妃となって長皇子と弓削皇子²⁸⁾をもうけている。川島皇子は大海人皇子の子泊瀬部皇女と結ばれており、大津皇子を誣告して自死に追いやったとされる（4.3.1項参照）。

天智天皇の子どもは上掲以外にもおり、男5人、女11人と多い。中大兄皇子は自分の娘たち、即ち、大田、サララ、大江、そして新田部皇女の四人をも弟大海人皇子に嫁がせている。皇女たちは中大兄皇子と大海人皇子の紐帯として政略結婚で嫁がされたのである。

一方、大海人皇子の子大津皇子の妃は中大兄皇子の子山辺皇女であり、大海人皇子の子泊瀬部皇女は中大兄皇子の子川島皇子の妃となっている。さらに、大海人皇子の寵愛を受けて十市皇女を産んだ額田王を兄中大兄皇子に差し出している。こうして兄弟は互いに安全保障を交わっていたのである。蒲生野（滋賀県近江八幡市を含む地域）で天智天皇（中大兄皇子）が遊獵したとき、額田王と大海人皇子が詠んだ雑歌に分類されてはいるが相聞歌とも

いえる内容の歌はよく知られている。

あかねさす^{むらさきの}紫野行き^{しめの}標野行き^の野守は見^のみずや君が袖振る (20番)
紫草^{むらさき}の^はほへる^{いも}妹を憎^いくあらば人妻^{あやめ}ゆゑにわれ恋ひめやも (21番)

「茜色を帯びるあの紫の草の野を（あなたが行きながら）一野の番人は見えていないでしょうか—あなたは袖をお振りになることよ」と額田王が歌うと大海人皇子は、「紫草のように美しいあなたが憎かったら、あなたは（もう）人妻なのに、どうして恋い慕うことがあるう」と返している。この2首は宴席での即興の戯れ歌の応酬だろう。

さて、何故、中大兄皇子と大海人皇子は同母の兄弟でありながらこれほどまでに安全保障を築く必要があったのであろうか。その理由を推測してみる。

兄弟の母宝皇女は舒明天皇に嫁ぐ前、用明天皇の孫高向王^{たかむくのおおきみ}に嫁ぎ、漢皇子を生んでいる。さらに、書紀では、大海人皇子の生年や年齢をはっきりとは記載していない。これらのことから、関裕二はこの漢皇子こそ大海人皇子の正体ではないかと疑っている²⁵⁾。そうなると、二人は同母ではなく異母兄弟で、年齢的にも兄と弟は逆転する。更に言えば、「乙巳の変」にも百濟救援の斉明天皇の西征にも大海人皇子の影が薄く、彼の妃大田皇女が人質としてであろうか身重ながら随行させられている。このとき、彼女は大伯皇女を産む。また、4.2.2項で述べるように中大兄皇子の不人気の裏返しとして大海人皇子の人気は高かったと考えられる。したがって、中大兄皇子は自身の安全保障のために娘四人をも大海人皇子に与えたと考えても無理はない。

4.2.2 中大兄皇子の政権支配

中大兄皇子は、孝徳天皇が崩御した後も皇太子として辣腕をふるい62歳の母皇極天皇を重祚させ、斉明天皇（37代、在位：655～661年）として再登場させた。結局、中大兄皇子は舒明天皇（34代）の皇太子でありながら、母宝皇女が皇極天皇（35代）として即位し、次いで、乙巳の変で蘇我宗家を滅亡させた後も叔父孝徳天皇（36代）が皇位を継承し、孝徳天皇が崩御した後も後継者となれず、再び皇極天皇（宝皇女）が重祚して斉明天皇が即位することになったのである。中大兄皇子が皇位に就けないあるいは就かないわけはよく分からないが考えられる理由を挙げると、

- ① ① 先ず、中大兄皇子の残忍さによる不評がある。孝徳元年（645年）、皇極天皇の後継候補であった異母兄^{ふるひとのおおえ}の古人大兄皇子を謀反の罪で死罪としている（3.7節）。また、右大臣蘇我倉山田石川麻呂も謀反の讒言によって自殺に追いやっている（4.1.1項）。さらに、孝徳政権を見捨てることによって大化の改新による改革を頓挫させ、孝徳天皇を孤立させ、失意のうちに死

なせている。そして本節の主人公の有間皇子もまた、謀反の罪で縊り殺している。

- ② 齊明政権の時代、朝鮮半島は動乱の最中であって、新羅、百濟、唐、高句麗、倭（日本）は互いに死闘を繰り返していた³⁾。中大兄皇子が多くの方針を押し切って百濟救援に猪突した。百濟復興の野望を抱いていたであろう百濟王子の豊璋、即ち、中臣鎌足の強い要望であったとしたら彼の強引な遠征は理解できる。そして、齊明7年（661年）、親征した齊明天皇は朝倉宮（福岡県朝倉郡）で崩御している。その後、663年、倭—百濟（遣民勢力）連合軍は、百濟王子豊璋を救援するために派遣されたが、唐—新羅連合軍との海戦で敗北し、百濟は完全に滅亡する。これが「白村江の戦い」である。この戦いの大敗は中大兄皇子にとって大きな痛手であった。
- ③ 更に、蘇我赤兄が有間皇子を齊明天皇に三つの過ちがあるといつて謀反を唆したように、大規模な土木工事を行っていることである。書紀の齊明天皇の項に「時に 事を興すことを好みたまひ 迺ち水工をして渠を穿らしめ 香山の西より石上山に至る 舟二百隻を以ちて 石上山の石を載みて 流の順に宮の東に控引き 石を累ねて垣とす」とある。人々は、「狂心の渠」と誇ったという。そして、齊明天皇は「狂心の天皇」³⁰⁾とも言われているが実権は中大兄皇子が握っていた。

①～③の理由によって中大兄皇子は人々の反感を買ひ、なかなか皇位には就けずにいたのではないか。一方、中大兄皇子に対する不平分子の旗印となったのが弟大海人皇子である。大海人皇子の人氣は、中大兄皇子の不人氣の裏返しと考えられ、「壬申の乱」の遠因にもなっている。

中大兄皇子は、天智元年（661年）、齊明天皇が崩御した後も即位式を挙げないまま天皇としての政務をとっている。これを称制という。さらに、「天下の百姓 遷都すことを願はずして・・・」との多くの反対を押し切り、大津宮（滋賀県大津市）に遷都している。天智8年（669年）に百濟から渡来した王族ら700余人を近江蒲生郡に移住させているので、近江国は百濟系渡来人の一大本拠地であり、中大兄皇子の政権基盤でもあり、安定した政権が維持できると考えたため遷都したのであろう。彼はそこで天智天皇（38代：在位668～671年）として即位した。天皇在位は3年間にすぎないが長期に亘る皇太子と称制の期間に「乙巳の変」で大功を立てた股肱の臣中臣鎌足とともに、

- ① 日本初の戸籍である庚午年籍の作成、
- ② 近江令の制定、
- ③ 辺境の東北地方における柵（城郭）の設営

など多くの業績を残している。なお、天智8年(669年)、天智天皇は中臣鎌足の死に臨み、彼の功績を讃えて藤原姓を与えている³¹⁾。

4.2.3 壬申の乱の序曲

天智天皇の後継は弟で皇太子の大海人皇子とされていたが、天智天皇には成人に達した我が子大友皇子に皇位を継がせる意図があった。しかし、大友皇子の母は伊賀国造の娘伊賀采女宅子娘であり、地位は宮人だった(図5参照)。当時の習慣では、皇位継承者の条件は実母が皇族出身者であることだったことから、大友皇子には皇位継承の資格はなかったと言える。そこで、天智天皇は評価の高い大海人皇子への対抗策を考える。即ち、天智10年(671年)、大友皇子を新たに設けた太政大臣職に就け、政権の中枢に据えて後継として朝廷を主宰させたのである。太政大臣は国政を総覧する官職であり、皇太子の職掌と重なる。大友皇子と大海人皇子の権力が拮抗するように配置したのである。近江政権としても大友皇子を後継者として擁立するという了解と共通の認識があったものと思われる。そして、かつて有間皇子を巽に嵌めた蘇我赤兄を左大臣とし、藤原鎌足のいとこ中臣金連を右大臣として近江政権を固めた。そのため、大海人皇子には失政がないにも拘らず近江政権では孤立して身の危険を感じるようになった。

天智10年(671年)10月、病を得た天智天皇は大海人皇子を呼び出した。大海人皇子は自分が後継者(皇太子)であると思いながらも兄天智天皇に暗殺されるのではないかと不安を抱きつつ参内した。そのとき、大海人皇子に、「有意ひて言へ」と忠告する者がいて、何か陰謀があるのではないかと一層、用心した。天智天皇が、「朕疾甚し後事を以て汝に属く(私は重病である後事をお前に託したい)」と皇太子に話したところ、大海人皇子は固辞して、「請はくは洪業を奉げて大后に付属けまつり大友王をして諸政を奉宣はしめむことを臣請願はくは、天皇の奉為に出家して修道せむ(どうか天下の大業を皇后(倭姫)に付託なさり大友皇子にすべての政務を執り行って頂くようにお願いします私は天皇のために出家して修行したいと存じます)」と答えて、剃髪出家して、妃のサララ皇女や皇子たちを連れて直ちに吉野へ発ってしまった。吉野への逃避は3.7節で述べた古人大兄皇子の吉野入りに次ぐ事例である。菟道(京都府宇治)まで見送った近江政権の重臣の一人が、「虎に翼を着けて放てり」と言った。吉野に至った大海人皇子は舍人たちに、「我今し入道修行せむとす故随ひて修道せむと欲ふ者は留れ若し仕へて名を成さむと欲ふ者は還りて司に仕へよ」と告げたとこ誰一人として退出した者はいなかった。大海人皇子の人望や勢力が無視し難いことを表わしているとともに、舍人たちは大海人皇

子の意図を十分に察していたと考えられる。

天智10年11月、いよいよ病が重くなった天智天皇は、大友皇子と近江政権の蘇我赤兄や中臣金連ら重臣五人を集め、誓盟の儀式を行った。大友皇子は香炉を手にして立ち上がり、「六人心を同じくして 天皇の詔を奉る 若し違ふこと有らば必ず天罰を被らむ」と誓って宣告すると、他の者も皆、「臣等五人 殿下に随ひて 天皇の詔を奉る・・・(私ども5人は大友皇子と同じく天皇の詔に随います)」と泣きながら誓盟した。その後、五人は大友皇子を奉じますと天智天皇の御前で盟約した。この誓盟の儀式は、大友皇子の立太子の儀式とも事実上の即位式とも言われており、大友皇子はこのとき即位したと見做して明治3年に弘文天皇と追諡されている。そして、天智天皇は天智10年12月、46歳で崩御する。

4.2.4 壬申の乱³²⁾

大海人皇子や壬申の乱についての書紀の記述は、大海人皇子の子舎人親王が編纂したものであるから、出自も含めて大海人皇子を正当化する歴史の改竄があったかも知れないことを前提に話を進める。

天武元年(672年)6月、吉野に逃れた大海人皇子に舎人(近習)が、「美濃・尾張の両国で近江朝が天智天皇の御陵を造るために人夫を集め武装させています」とか「近江京から大和に至る道のあちこちに斥候が置かれ、また、宇治川にかかる橋で舎人の私用の食料を運ぶのを阻止しています」と報告した。大海人皇子は事実を確認すると、「朕位を譲り世を遁る所以は 独り病を治め身を全くして 永に百年を終へむのみ 然るに 今し已むこと獲らずして 橋を承けむ 何ぞ黙して身を亡さむや」と言って、美濃の豪族三人に、「今し聞かく 近江朝廷の臣等 朕が為に害はむことを謀るとき 是を以て汝等三人 急く美濃国に往りて・・・先ず 当郡の兵を發せ 仍りて国司等を経て 諸軍を差し發して 急ぐ不破道を塞へよ 朕は今し發路たむ」と挙兵を決意し、進軍を命じた。こうして、敵味方総勢六万にも及ぶ兵力が衝突する古代最大の騒乱「壬申の乱」が勃発した。書紀に拠れば、「是の時に 近江朝 大皇弟の東国に入りたまふことを聞き 其の群臣 悉く愕ちて 京内震動く・・・」とあり、戦う前から、近江政権の軍勢は勝ち目が無いと動揺したことが覗える。ここに、東国は伊賀以東の東海道と美濃以東の東山道を指す。

壬申の乱の戦闘は奈良、三重、岐阜及び滋賀県に及んでいる。近江政権軍の大將山部王(舒明天皇の孫?)が味方に殺された他、大海人皇子軍側への寝返りが起きるなどしたため近江政権軍は瀬田(滋賀県大津市)の決戦に敗北し、大友皇子は自害した。享年25歳であった。また、かつて有間皇子を

嵌めた左大臣蘇我赤兄は瀬田の戦いに出陣したが逮捕されて配流（配流地は不明）となっている。

壬申の乱が勃発した理由は必ずしも明確ではないが、

- ①前述（4.2.2項）のように中大兄皇子が絶大な権力を誇りながらもなかなか皇位に就けなかった行実ぎょうじつへの反動や、
- ②長男ながら宮人の子である大友皇子を天智天皇が強引に後継にしようとしたことなどを背景に、
- ③大海人皇子を支持する勢力が形成されたことが乱勃発の原因と考えられる。あるいは、
- ④4.2.1項で述べたように、高向王たかむくのおおきみの子漢皇子あやかともいわれ正体がはっきりしない大海人皇子の強い政権奪取への意欲が原因なのかもしれない。

ともかく、大友皇子は叔父によって戦いに追い込まれ無念の自害をした悲劇の皇子である。大海人皇子は、国を二分する壬申の乱に勝利し、多くの有力氏族が滅亡した翌年の天武2年（673年）、百済系遺民の集住する近江から飛鳥に遷宮し、飛鳥浄御原宮で天武天皇（40代、在位：673～686年）として即位した。壬申の乱で死んだ皇族は大友皇子と山部王のみであり、生き残った天智天皇系の他の皇族は天武政権を構成したが、政治上、百済系は全く取り上げられていない。

天武天皇は、八色姓やくさのかばね³³）で氏姓制度の再編を行って中央集権的な律令国家体制を整備し、専制君主として君臨した。この頃、朝鮮半島の情勢が激変している。即ち、百済が完全に滅び、続いて起った唐と新羅の戦いは天武5年（676年）まで続いていたため、日本は唐との関係を断っている。遣唐使はすでに天智8年（669年）以降途切れおり、再開されるのは42代文武天皇の大宝2年（702年）である。また、天武天皇は日本固有の神道と外来仏教かむみやの双方の興隆策を進めた。例えば、壬申の乱の際、大海人皇子が伊勢神宮に戦勝祈願したところ、皇室の祖神アマテラスがサララ皇女に降臨して加護した結果、乱に勝利できたことに報いるべく、大田皇女が産んだ大伯皇女を伊勢神宮へ齋王いづきのみこととして仕えさせている。

4.2.5 大友皇子の人物評価

壬申の乱に追い込まれ、自死に至った悲劇の大友皇子は文武二道の人であった。懐風藻34）によれば、大友皇子の体格は逞しく容貌に優れ、風容は広大で深遠であり、博学で文武の才に長じていたなどと褒めている。天智7年（668年）、天智天皇即位後の宴席はべに侍ったときに大友皇子が詠んだ五言絶句、「侍宴」は天皇の徳を讃え、威光を述べ、隆盛を祝福している。

皇明光日月	皇明 ^{こうめい} 日月 ^{ひつぎ} と光 ^て らひ
帝徳載天地	帝徳 ^{あめつち} 天地と載 ^の せたたまふ
三才並泰昌	三才 ^{みなだいしやう} 並泰昌
万国表臣義	万国 ^{ばんこく} 臣義を表はす
天子の威光は日月のようにこの世に光り輝き	
天子の聖徳は天地に満ちあふれている	
天・地・人の三才はともに太平で栄え	
四方の国々は臣下の礼をつくしている	

「天子の威光は日や月のように照りわたり 天子の徳は天や地が万物を覆い載せるように広大である」と天智天皇を謳歌している。もう一首、自分の心の内を述べた絶句、「述懐」は

道徳承天訓	道徳 ^{てんくん} 天訓 ^う を承 ^う け
鹽梅寄眞宰	鹽梅 ^{あんばいしんさい} 眞宰に寄 ^う す
羞無監撫術	羞 ^は づらくは監撫 ^{かんぶ} の術 ^{わざ} 無 ^な きことを
安能臨四海	安 ^な ぞ能 ^よ く四海に臨 ^ま む
天の教えをよく承って守るべき道を行い	
鹽梅は天子が行う良い政治に寄与する	
恥ずかしいことには、自分に監撫の手腕がない	
どうして天子を助けて天下に臨めようか	

「自分は天の教えをよく承って人として守るべき道を行い また程よく国家を経営して天に寄与したいと思っている 鹽梅は薬を作るのに塩が効きすぎると辛くなり 梅が過ぎると酸っぱくなるので塩と梅とを適当に加減して始めて程よくなるように 臣下（自分）が眞宰（天子）を助けて適切な良い政治して頂きたいが 恥ずかしいことには 自分に天子の補佐役として監撫の手腕がない どうして天子を助けて天下を治めることができようか いやできなくて恥ずかしい次第である」と天智天皇の後継者と見做されている皇子は謙遜している。ここに、監撫は監国撫軍のことで、天子が地方巡幸や征行の際に太子が都に留まり守ることを監国、他に都を守る者がいるときに天子とともに従軍することを撫軍という。

大友皇子の正妃は大海人皇子と額田王との間に生まれた十市皇女である。即ち、大友皇子と十市皇女のいとこ同士のカップルは中大兄皇子と大海人皇子兄弟の血統上の結合を象徴する存在であったのだ。壬申の乱後、失意の日々を送っていた十市皇女が天智天皇の子阿閉皇女（後の元明天皇）と一緒に伊勢神宮に参詣したとき、吹黄刀自という女性が詠んだ歌が万葉集にある。

河^への上^ののゆつ岩^{いは}群^{むら}に草^{くさ}生^むさず常^{つね}にもが^な常^{とこ}処^{おとめ}女^{にて}にて (22番)

「川のほとりの聖石には苔も生えていない あのようにいつも変わらずにありますように 永遠の少女として。」十市皇女は薄幸佳人のイメージが鮮烈な悲劇の皇女である。天武7年(678年)、十市皇女が薨去したときに、壬申の乱で大海人皇子に代わって軍を指揮した高市皇子が彼女を悼んで詠んだ歌もある。

山振やまぶきの立ちよそひたる山清水酌やましみずくみに行かめども道の知らなく(158番)

「山吹の花が美しく飾っている山の泉(伝説上の生命復活の泉)に水を汲みに行つて(十市皇女の)生命を甦よみがえらせたいと思うのだが(道が分からな。)」

4.2.6 吉野の盟約

天武8年(白鳳8年:679年)、天武天皇はサララ皇后とともに吉野宮に行幸した。成人していた天武天皇の4人の皇子たちが同行している。即ち、長子で壬申の乱で活躍した嬪尼子あまごのいらつめ娘の子高市皇子、サララ皇后の子草壁皇子、サララ皇后の姉大田皇女の子大津皇子、嬪かぢ(櫛)媛娘の子忍壁皇子である(図4参照)。更に、天智天皇の子志貴皇子と川島皇子も同行している(図5参照)。天武天皇は6人の皇子たちに、「朕今日汝等と俱に庭に盟ひて千歳ちとせの後に事無からしめむと欲おもほす奈之何(私は今日 お前たちとともにこの宮庭の庭で盟約を結び 千年の後まで事の起らないようにしたいと思うが どうか)」と尋ねた。一同は「理実ことわり灼然いやらこなり(道理は誠に明白でございます)」と答え、先ず、草壁皇子が進み出て誓いの言葉を述べた。「天神地祇あまつかみにつかみと天皇あみ証あかしめたまへ吾兄弟長幼おのれ えおとひとりをさなきあわ併せて十余王とをあまりのみこ各異腹おのもおのもことほらより出でたり然れども同じきと異れると別わかず俱ともくに天皇の勅みことりの隨まに相扶あひたすけて忤さかふること無けむ若し今より以降あやま此の盟うみの如くにあらずは身命いのち亡わび子孫絶えむ忘れじ失たじ(天神地祇および天皇よ どうかお聞きください 私ども兄弟 長幼合わせて十人余りの皇子は それぞれ異なつた母から生まれました しかし同母 異母に関わらず共に天皇の 詔みことりに従つて 互いに助け合い 逆らうことはいたしません もし今後この盟約に背くようなことがあれば 命を失い 子孫は絶えましよう これを忘れません 過ちは犯しません。)」他の五皇子たちも次々と誓つた。すると天武天皇は、「朕が男等 各異腹にして生まれたり 然れども今し一母同産の如くに慈まむ(我が子どもたちはそれぞれ異なつた母から生まれたが これからは同母兄弟のように慈しよう)」と言って皇子たちをハグした。サララ皇后も天皇と同様に盟約した。ここに、天武天皇の皇子たちの序列は、草壁皇子、大津皇子、高市皇子そして忍壁皇子の順である。大津皇子が序列2位であることに注目したい。この吉野の盟約(または六皇子の盟約)劇は、天武天皇の後継を巡る内紛を避け、我が子草壁皇子を後継にと望むサララ皇后が仕組

んだものと思われる。天武 10 年（681 年）、彼女の思惑通り、草壁皇子は皇太子となる。しかし、器量の優れた大津皇子も政権に参加することになり、この吉野の盟約は曖昧模糊となる。そして天武天皇崩御の後、大津皇子に悲劇が起こるのである。

4.3 大津皇子の場合

4.3.1 大津皇子の悲劇の経過

前述のように天智天皇の子太田皇女とサララ皇女（皇后）の姉妹はともに大海人皇子の妃となっている。姉は大海人皇子の第三子大津皇子（663～686 年）を産み、妹サララ皇女は第二子草壁皇子（662～689 年）を産んでいる。草壁皇子が 1 歳年上で、二人は天智天皇と天武天皇の血を引く異母兄弟である。しかし、大津皇子は天智天皇の長女大田皇女の長子だったので、天智天皇は大津皇子に大いに期待していたであろうが、大田皇女は大海人皇子が天武天皇として即位する前に死んでしまった。実母の死は大津皇子にとって草壁皇子との対立を含め人生に大きな影響を与えることになる。皇后となるべき太田皇女の死によってサララ皇女が天武天皇の皇后にシフトした。

草壁皇子は天武 8 年（679 年）、「吉野の盟約」で事実上の後継者となり、天武 10 年（681 年）に皇太子位に就いている。その後、序列 2 位の大津皇子も天武政権への参画が認められ、有力な王位継承者と見做されるようになる。朱雀元年（686 年）7 月、重病に陥った天武天皇は草壁皇子とサララ皇后に大権を委任して 9 月に崩御した。サララ皇后は不可解なことに皇太子である草壁皇子を後継に立てることなく、称制をとり、草壁皇子とともに政務を執っている。10 月 2 日、大津皇子は草壁皇子への謀反が発覚したとして、サララ皇后によって翌 3 日に自殺させられている。これは「大津皇子の変」と呼ばれ、大津皇子とともに吉野の盟約をした莫逆^{ばくげき}の友であった天智天皇の子川島皇子が密告したとされる。しかし、実際は、サララ皇后が、周囲から称賛される器量の大きい大津皇子をわが子草壁皇子のライバルと見做して謀殺したのであろう。サララ皇后は自身が主導した「吉野の盟約」を自ら破ったのである。姉の子を処刑してまで排除する必要があったのであろうか。

懐風藻にみる大津皇子の「臨終」と題する辞世の五言絶句は絶唱である。

金烏臨西舎 金烏西舎に臨み
 鼓聲催短命 鼓聲短命を催す
 泉路無賓主 泉路賓主無く
 此夕離家向 此の夕家を離れて向う
 太陽が 西の建物に 射しかかり
 鼓の音は 命を縮めるのを 急かせている

黄泉の道では 客と主人の 区別が無く
この夕べに 家を離れて 向かおう

金色のカラスは太陽のこと、鼓は時間を知らせる太鼓の音でこの時は夕刻を知らせる太鼓、泉路は黄泉の国に辿る魂の道、離家向は住み慣れたこの世の家を離れて西方浄土へ向かうとの意である。

24歳で自殺させられた大津皇子の正妃山辺皇女は天智の皇女である。このカップルもいとこ同士で、天智天皇と天武天皇の血統上の結合を意味している。山辺皇女は、大津皇子の自害を知り、悲しみのあまり半狂乱となって髪を振り乱し、裸足で走り、駆けつけ、その日のうちに皇子を追って殉死している。山辺皇女（母は常陸娘）は異母姉サララ皇后（母は遠智娘）に殺されたともいえる悲劇の皇女なのだ。

サララ皇后は天武天皇崩御ののちは称制を執り、持統天皇として即位するのは4年後の690年である。彼女が称制を執ったのは、大津皇子の処刑を予め計画し、宮廷内の反感や批判が草壁皇子に及ぶことを避けるためであったと思われる。そして、ほとぼりが冷めたところを見計らって草壁皇子を皇位に就けるつもりであったのだろう。しかし、サララ皇后の願い空しく、持統3年（689年）、草壁皇子は28歳で病死してしまっただ。彼もまた、悲劇の皇子である。彼が石川女郎という女性に贈った歌が万葉集にある。

大名児が彼方野辺に刈る草の ほんの東の間もわが忘れぬや (110番)

「大名児が遠くの野辺で刈る草のほんの東の間も私は忘れるなどということがあろうか。」

草壁皇子の殯宮のときに柿本人麻呂の詠んだ歌が万葉集にある。

・ ・ ・ わご王 皇子の命の 天の下 知らしめしせば 春花の
貴からむと 望月の 満しけむと 天の下 四方の人の 大船の
思い憑みて 天つ水 仰ぎて待つに いかさまに 思ほしめせか ・ ・ ・
朝ごとに御言問はさぬ 日月の 数多くなりぬる そこゆゑに 皇子
の宮人 行方知らずも (167番)

「 ・ ・ ・ わが大君たる皇子の尊（草壁）が天下をご統治なさったら 春の花のように貴いことだろう 満月のごとくに満ち足りておられることだろうと 天下のあちこちの人が まるで大船のような期待を心にもって 天の慈雨を待ち仰ぐごとくであったのに どういうご配慮からか ・ ・ ・ いつの朝の奉仕にもお言葉を賜わらぬ月日が多くなったことだ そのために皇子の宮にお仕えした人々は、どうしたらよいか途方に暮れることよ。」

反歌

ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまくをしも (168番)

「遙か天空を見るように仰ぎ見た皇子の御殿が荒れていくだろうことが惜し

いよ。」

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも (169 番)

「茜色を帯びて日輪は今日も輝いているのだが 太陽にも似た皇子は ぬばたまの黒々とした夜空を渡る月のように隠れてしまったことが惜しいよ。」

草壁皇子は皇位に就くことなく亡くなってしまったが、彼の両親（天武・持統）、妻（元明）、子（文武・元正）、孫（聖武）が皇位に就いている。悲劇の皇子は皇室のサラブレッドであった（図 4 参照）。

4.3.2 大津皇子の評価

懐風藻によると大津皇子はなかなかの文化人で詩人、かつ武道にも長けていた。恐らくサララ皇后は我が子草壁皇子と比べ羨んだことであろう。

状貌魁梧 器宇峻遠 幼年にして学を好み 博覧にして能く文を属る
 壮に及びて武を愛み 多力にして能く剣を撃つ 性頗る放蕩にして
 法度に拘れず 節を降して士を礼びたまふ 是に由りて人多く付託す

「身体容貌が大きく逞しく 人品（度量）が高く奥深い 幼年時代から学問が好きで 広く書物を読んで物事を知ってよく詩作する 大人になってからは武を好み よく剣を使う 性質はかなり放逸であって規則に拘束されない 自分の身分を遜って教育や地位のある人々を厚く礼遇する 従って多くの人はつき従うのである」と最高の賛辞を贈っている。「春苑言に宴す」と題した大津皇子の五言絶句を紹介する。

開襟臨靈沼	衿を開きて靈沼に臨み
遊目歩金苑	目を遊ばせて金苑を歩む
澄清苔水深	澄清苔水深く
曖曖霞峰遠	曖曖霞峰遠し
驚波共絃響	驚波絃の共響り
哢鳥與風聞	哢鳥風の與聞ゆ
群公倒載帰	群公倒に載せて帰る
彭澤宴誰論	彭澤の宴誰か論らむ

衣の襟を開いてくつろいで御苑の池に臨み
 春色に目を楽しませて御苑（禁苑）を逍遥する
 水は澄みきって深い底に生えた苔が見え
 暗くぼんやりと霞のかかった峰が遠くに見える
 宴席では、騒ぐ池波は琴の音につれて響き
 さえずる鳥の声は風とともに聞こえる
 諸公は酔い潰れ逆さまに車に乗せて帰る状態だ
 彭澤の宴もこの酒宴に比べると論ずるに足らない

彭澤の酒宴とは、詩と酒に耽った彭澤県令の陶淵明（365～427年）が官を辞して故郷（現在の江西省）の田園に隠棲する前に催した酒宴である。陶淵明は無弦の琴（云わばエアギター）を携え、酔えばその琴を愛撫して心の中で演奏を楽しんだという逸話がある。

4.3.3 姉弟の愛の歌

大津皇子と大伯皇女の歌を挙げる。大津皇子は、自害する直前に、齋宮^{いつきのみや}である姉大伯皇女が居る伊勢神宮を密かに訪ねている。そして、彼が大和へ帰るときに大伯皇女が詠んだ歌が2首ある。

わが背子を大和へ遣るとき夜深けて 暁露にわが立ち濡れし（105番）

二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君が独り越ゆらむ（106番）

105番の歌は、「わが背子（弟）を大和に送るとて 夜も更け やがて明け方の露に濡れるまで私は立ち続けたことであつた」と詠い、106番は、「二人で行ってさえ越えがたい秋の山をどのようにしてあなたは今一人で越えていることだろう。」二首とも落魄の気持ちで詠んでいることから、あるいは大津皇子が身に危険が迫っていることを姉に打ち明けに行つたのかも知れない。

朱鳥元年10月3日、父天武天皇が崩御して一ヵ月足らずの後、死を賜つた大津皇子が香具山の北にある磐余の池の堤で涙を流して詠んだ辞世の歌は、

ももつたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ（416番）

「百に伝わる磐余の池に鳴く鴨を見るのも今日を限りとして私は雲のかなたに去るのだろうか」である。懷風藻に採録されている五言絶句「臨終」とともに静かに味わいたい。

大伯皇女は弟大津皇子が罪を犯したことから齋宮の任を解かれ11月16日には帰京している。そして仲の良かった弟を偲んだ歌二首、

神風の伊勢の国にもあらましをなにししか来けむ君もあらなくに（163番）

見まく欲りわがする君もあらなくになにししか来けむ馬疲るに（164番）

163番は、「神風の吹く伊勢の国にも居ればよかつたものをどうして都に帰つてきたのだろう あなたもいないことだのに」と嘆き、164番は、「会いたいと思うあなたももういないのにどうして来たのだろう徒に馬がつかれるだけだのに」とまた嘆いている。そして、大津皇子の遺体を「殯」（本葬の前に使者を仮に祀る場所）から葛城の二上山に移したときに詠んだ歌は、

うつそみの人あるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む（165番）

磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言わなくに（166番）

165番では、「現し身の人である私は明日からは二上山をわが弟と見ようか」と嘆き、続く166番では、「岸のほとりに咲く馬酔木を手折って思わず花を見せたいと思うけれども見せるべきあなたは居ないのに」と詠っている。

4.3.4 天孫降臨に擬す

サララ皇后は、後継者として期待していた草壁皇子が死んだ後、高市皇子など有力な後継候補者がいるにも拘らず、称制を執ること4年(690年)にして自ら即位して持統天皇(41代、在位：690～697年)となる。持統天皇は遷都を決意し、持統8年(694年)、飛鳥浄御原宮から藤原宮に遷っている。遷都に際して、長屋の原に神輿を停めて、天武天皇と一緒に暮らした飛鳥から去ることに思いを馳せて詠んだとされる挽歌がある。

飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ(78番)

「飛ぶ鳥の明日香の里を後にして(藤原京へ)いったなら あなた(天武天皇)がいる(墓所の)あたりを目にすることができなくなってしまうだろうか。」ただし、この歌は阿閉(阿部)皇女(元明天皇)が亡夫草壁皇子を偲んで詠んだ歌ともいわれる。また、藤原宮に遷宮したとき、天智天皇の皇子で万葉歌人でもある志貴皇子が詠った歌がある。

采女の袖吹き返す明日香風都を遠みいたづらに吹く (51番)

「采女の袖を吹きひるがえす明日香の風 今は都も遠く 空しく吹くことよ。」

ここに、持統天皇の即位は、わが子草壁皇子と持統天皇の異母妹阿閉皇女(母は姪娘：後の元明天皇)との間に生まれた幼い珂瑠皇子に皇位を継承させるため、つなぎとして自らが皇位に就いたと考えられ、7年後に珂瑠皇子に譲位している。この経緯は、古事記における天孫降臨の場面に酷似する。すなわち、天上界の高天原の神が地上(葦原中国)を治めることになったとき、「アマテラスは当初、太子であったオシオミミの降臨を予定していたが、太子はニギという子が生まれましたのでその子を降ろすのがよいでしょう」といったので、実際にはアマテラスの孫ニギが八尺の勾玉・鏡・草なぎ剣の三種の神器を与えられ高千穂の峰に降り立った」との記述に対応する。アマテラス、オシオミミ、ニギはそれぞれ、持統天皇、草壁皇子、珂瑠皇子(文武天皇)があてはまり、天皇は実力でなく血縁で決まるという天皇制の整備を古事記の中で意図したものと考えられる。ちなみに、サララ皇女は高天原広野姫とも呼ばれている。持統天皇はカリスマ的権威を体現していた天武天皇の政策を引き継ぎ、藤原不比等を抜擢して飛鳥浄御原令を制定し、中央集権体制を整備した。壬申の乱の後、天武・持統両天皇の治世の期間は白鳳文化の時代(7世紀後半～8世紀初頭)と呼ばれ、文化的には飛鳥時代(推古天皇前後の時代で6世紀末～7世紀前半)と奈良時代の最盛期とされる天平時代(元明天皇が平城京へ遷都した710年～桓武天皇が平安京へ遷都した794年)の中間に位置する。

4.3.5 草壁皇子の子孫たち

天武天皇と持統天皇の間に生まれた草壁皇子は、持統3年(689年)、27歳で薨去したことは上述のとおりである。死の直前、彼は藤原不比等³¹⁾にわが子珂瑠皇子の将来を託している。後年、その珂瑠皇子が安騎の野(奈良県宇陀郡)で遊獵して宿泊したとき、柿本人麻呂が詠んだ歌はよく知られている。

東の野に炎の立つ見えてかえり見すれば月傾きぬ (48番)

「東方の野の果てに曙光がさしそめる ふりかえると西の空に低く下弦の月がみえる。」この歌は単なる叙景歌でなく、亡き草壁皇子への追憶や壬申の乱の回想として読むべきだと考える人もいる³⁵⁾。

持統11年(697年)、持統天皇の譲位により珂瑠皇子が文武天皇(42代、在位：697～707年)として即位した。文武天皇が難波の宮に行幸したとき(706年)、志貴皇子が詠んだ歌がある。

葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕べは大和し思ほゆ (64番)

「葦辺を泳ぐ鴨の背に霜が降り 寒さが身に染みる夕べは 故郷の大和が思われてならない。」

文武天皇には図4に示すように幼い首皇子^{おびと}がいたが、707年、文武天皇は母阿閉皇女に万機を撰する詔を遺して25歳で崩御した。そこで首皇子が成人するまでの中継ぎとして、阿閉皇女が元明天皇(43代、在位：707～715年)として即位した。和銅3年(710年)、藤原不比等の主導により、元明天皇は遷都の詔を出し、葛城山を望む飛鳥の藤原京(橿原市)から北上して生駒連峰を西に臨む平城京(奈良市・大和郡山市)へ遷都して天平時代が幕を開け、唐文化の移入によって建築や工芸を含むあらゆる部門で大陸的な文化が発達した。また、律令国家として盛期を迎えた。新たな都においては国家支配のために、元明天皇の和銅5年(712年)、古事記が献上され、翌年(713年)に地誌としての風土記の編纂が命じられている。また、養老4年(720年)、書紀が日本最古の勅撰正史として完成している。

首皇子が即位する前に、更にもう1人の中継ぎとして、文武天皇の姉氷高皇女^{ひだか}が皇位に就き元正天皇(44代、在位：715～724年)となり、724年になってやっと首皇子は聖武天皇(45代、在位：724～749年)として皇位を引き継いだ。聖武天皇と皇后光明子には阿倍内親王(阿部皇女)しか子どもがいなかったので、聖武天皇が彷徨五年³⁾の後、自らを三宝の奴³⁶⁾と称して皇位を抛り出した後、異例の女性皇太子であった阿倍内親王が孝謙天皇(46代：在位749～758年)として即位した。しかし、孝謙天皇は、時の実力者である横暴な藤原仲麻呂(恵美押勝)に嫌気がさしたのか、彼に退位を迫られたのかは分からないが、藤原仲麻呂が強権的に推す舍人親王の子を淳仁天皇(47代、在位：758～764年)として即位させ、自らは上皇となった。孝謙上

皇は自らの病氣平癒を祈祷した僧弓削道鏡ゆげのどうきょうに絶大な信頼を寄せ、寵愛した。そこで、藤原仲麻呂が孝謙上皇に道鏡への過度な寵愛を諫言したところ、彼女の逆鱗に触れた。その結果、孝謙上皇一道鏡ラインと淳仁天皇—藤原仲麻呂ラインの政争に発展する。そして、藤原仲麻呂は朝敵となって近江国で斬殺され、淳仁天皇は淡路に配流（淡路廢帝）となってしまふ。この騒乱を「藤原仲麻呂の乱」という。その結果、孝謙上皇が重祚して称徳天皇（48代、在位：764～770）となったが、独身の彼女には子がなく後継として天武天皇系の嫡流（男系）にあたる皇族がいなくなった。天武天皇が吉野の盟約で「千歳ちとせの後に、事無からしめむと欲す」と誓わせたが90年余りで天武系は絶えてしまったのである。そのため、後継には、天智天皇の皇子で吉野の盟約にも参加した志貴皇子の第六皇子白壁王が62歳の高齢にも拘らず光仁天皇（49代、在位：770～781年）として即位し、更に、その子が桓武天皇（50代、在位：781～806年）として即位した。

5. おわりに

本稿では、多くの悲劇の皇子たちを見てきた。仁徳天皇から始まる王朝の皇子たち（図2参照）、継体天皇から始まる王朝の皇子たち（図3参照）である。もっとも父を殺されたが難を逃れ、顕宗天皇になったヲケ皇子や仁賢天皇となったオケ皇子兄弟もいる。特に、4章で悲劇の皇子として取り上げ、皇位継承に絡んで非業の最期を遂げた有間皇子（640～658：18歳）、大友皇子（648～672：24歳）そして大津皇子（663～686：23歳）の三人は、いずれもすぐれた詩人でもあった。

最終章では、皇位には関心を示さず万葉時代を大らかに生きた皇子を取り上げたい。その人は志貴皇子である。彼は天智天皇の第七子であるが、壬申の乱の後、天武天皇の諸皇子の一人として「吉野の盟約」に加わっている。志貴皇子は、天武政権では皇位には一切執着しらかべしていないし、彼の第六皇子白壁王しろかべも権力争いに巻き込まれることのない環境にいた。白壁王は藤原仲麻呂の乱の鎮圧に貢献し、称徳天皇の信任を得たが凡庸かつ暗愚を装っていたので危機に遭うことはなかった。称徳天皇が崩御すると、独身であった女帝に後継者がいない。また、多くの政変による粛清の結果、天武天皇系の男子皇族がいなくなっていた。そこで称徳天皇の異母妹井上内親王を妃とする62歳の白壁王に白羽の矢が立ち、光仁天皇（49代、在位：770～781年）として皇位を継承した。このとき、元号が宝亀と改められているのは高齢の新天皇の長寿を祈ったのことか。この白壁王の担ぎ出しによって皇統は天武天皇系から再び天智天皇系になった。光仁政権下でも凄惨な政権争いによる殺戮が起こっているが白壁王の第一皇子（母は百済系渡来人氏族の高野新笠たかののにいがさ）が桓

武天皇として即位して、平安遷都を果たし、万葉時代を含む奈良朝は終わった。そして静謐な人柄で万葉歌人としても知られる志貴皇子に始まる皇統が現在まで続いている。万葉歌人らしい志貴皇子が詠った新春の賀宴で題詠された春を迎える喜びの歌を最後に挙げておこう、

石ばしる^い垂水^{たるみ}の上のさ^{わらび}蕨の萌え出づる春になり^いにけるかも (1418番)

「岩の上をほとばしる滝の上に蕨が芽を出している ああ 春になったなあ。」

6. 参考文献と注記

- 山口佳紀・神野志隆光校注・訳：新編日本古典文学全集「古事記」，小学館(2009)。
- 小島憲之、直木孝二郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守校注・訳：「日本書紀」1～3，小学館(2012)。
- 杉山一男：「万葉時代のグリーンケミストリーへの序」，近畿大学工学部紀要，45号，109頁(2015)。
- 古代、ヤマト王権の統治者は大王や治^お天^あ下^め大王^のと呼ばれていた。天武天皇(40代：在位673～686)の頃には、「天皇^{すめらみこと}」が採用されるようになったが、神武天皇～元正天皇(44代：在位715～724)の天皇名のほとんどは奈良時代の大学頭であった淡海^{おうみのみ}三船^{みふね}が一括して選定した漢風諡号である。それ以降の天皇名は、諡号、生前の尊称、追号であったりする。諡号は生前の功績などを考慮して尊び死後に贈られる称号であり、追号は特に顕彰や讃美を含むことなく、御在所や御陵地などを号として呼ぶ。明治時代以降は、一世一元の制により、天皇が崩御されるとその御代の元号を冠して呼ばれる。本稿では、大王、王子、王女とすべきところを天皇^{すめらみこと}、皇子^{みこ}、皇女^{ひめみこ}と表記した。
- 小林恵子：「古代倭王の正体」，祥伝社(2016)。
- 中国古来の政治思想で、天子は天命を受けて天下を治めることができるがもしその家(姓)に不徳のものが出れば新たな有徳者が天命を受けて新しい王朝を開くことがあるということ。例えば、隋は北周静帝の摂政として全権を握っていた武将楊堅(文帝)が581年、静帝の禅譲を受けて建てたが、二代煬帝の孫で三代楊侑は李淵に禅譲して三世で滅んだ。李淵は唐を建てたので王朝は楊氏から李氏へ易世(姓)した。
- 倭の五王は、「宋書」や「梁書」に記される讚(仁徳天皇または応神天皇)・珍(反正天皇または仁徳天皇)・濟(允恭天皇)・興(安康天皇)・武(雄略天皇)である。彼らは413年～502年の間に13回も大陸と通交した。
- 中西進：「万葉集 全訳注原文付」，1～3巻，四季社(2008)。
- 笠原英彦：「歴代天皇総覧」，中央公論新社(2002)。

- 10) 古事記では、衣通王は允恭天皇の子軽大娘皇女とされるが、日本書紀では允恭天皇の皇后押坂大中姫の妹で天皇に愛されたとある。
- 11) 清寧天皇は雄略天皇の第三皇子で名を生まれながらの白髪であったことにちなんで、古事記では白髪大倭根子命しらかのおおやまとね このみことといひ、書紀では白髪武広国押稚日本根子天皇しらかのたけひろくに おしわかやまとねという。この白髪にちなむ部民（私有民）である。御名代は天皇・皇后・皇子たちの名を後世に伝えるために置かれた。
- 12) 古代、男女が山や市に集まり、歌をやり取りして踊りながら遊んだ行事。
- 13) 継体天皇在位中の 527 年、新羅の攻撃を受けた百済を救援するために倭軍を北部九州に派遣したが、新羅と内通した筑紫の国造の磐井(石井)が反乱を起こした。天皇は物部鹿鹿火大連を派遣して反乱を平定した。
- 14) 相原嘉之：「飛鳥・藤原地域における文化遺産の特質-世界遺産登録へ向けての覚書-」, 明日香村文化財調査研究紀要, 第 7 号(2008)。
- 15) 妃は皇后に次ぐ地位の女性または皇子の妻。夫人は後宮に入って天皇の寝所に待す三位以上の女性、嬪は夫人に次ぐ四、五位の女性で後世の女御や更衣にあたる。他に宮人がおり、後宮の女性で地方豪族の出身で身分の低い者をいう。
- 16) 息長氏は応神天皇（15 代）の皇子を祖とする豪族で、現在の滋賀県米原市を根拠地とした。この地は美濃や越国（石川・富山・新潟県を含む）へつながる交通の要衝である。息長古墳群にみられるように相当の力をもった豪族であった。
- 17) 大和朝廷において連むらじの姓かぼねを持つ氏族中、最有力の執政者。
- 18) 大和朝廷において臣おみの姓かぼねを持つ氏族中、最有力者。
- 19) 遺体を安置してある仮宮。
- 20) 遠山美都男：「臣、罪を知らず 蘇我氏四代」, ミネルヴァ書房(2009)。
- 21) 推古天皇は、603 年（推古 11 年）に豊浦宮で即位したのち、新宮として小墾田宮を造営して遷宮し、国家権力の中心地とした。この地で、厩戸皇子や蘇我氏が冠位十二階の制定、十七条の憲法制定、遣隋使派遣の決定などをした。
- 22) 聖徳太子が 601 年（推古 9 年）に造営した宮殿で、宮殿の西側に法隆寺や中宮寺などの斑鳩伽藍群を建立した。
- 23) 南淵請安は遣唐使で舒明 12 年 10 月、帰国して、中大兄皇子や中臣鎌足に儒教を教授した。
- 24) 高向玄理は 608 年、遣隋使として小野妹子に従って隋に渡り、留学中、隋が滅んで唐が建った。帰国後は国博士となり大化の改新の政策を立案した。白雉 5 年（654 年）遣唐押使となり、唐で客死する。
- 25) 関裕二：「古事記と壬申の乱」, PHP 新書(2012)。

- 26) 上宮の乳部は斑鳩宮の経営基盤として厩戸皇子に与えられた壬生部と呼ばれる貢納集団で、山背大兄皇子に引き継がれるとき上宮の乳部と呼ばれるようになった。また、皇子や皇女の出産・養育を仕事とする集団。
- 27) 「改新の詔」は、1) 私有地・私有民の廃止、2) 国・郡・里制による地方行政権の朝廷への集中、3) 戸籍の作成と耕地の調査による班田収授法の実施、4) 租・庸・調などの税制の統一の4項目からなる。
- 28) 弓削皇子は梅原猛によって高松塚古墳の被葬者に比定されている²⁹⁾。弓削皇子は万葉集に8首収録されている歌人でもある。天武天皇の妃であつた額田王に贈った歌をあげておこう。
- 古に恋ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴き渡り行く (111番)
- 「昔(天武天皇在世時代)を恋うる鳥だろうか 弓弦葉の御井(聖泉)の上を鳴きながらわたり過ぎていくことよ」と共感を求めた歌に額田王が和している。
- 古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きしわが念へる如 (112番)
- 「あなたが「昔を恋う」という鳥は霍公鳥でしょう 恐らくは鳴いたであります 私(額田王)が昔を恋しく思うように。」カッコウ(郭公)とホトトギス(霍公鳥)は別の鳥だが古来混同がある。中国の蜀王がホトトギスになって不如帰・不如帰と鳴きながら飛んだという伝説を謎かけている。弓削皇子 20 歳代、額田王 60 歳代の贈答歌であろう。
- 29) 梅原猛：「黄泉の王―私見高松塚」, 新潮文庫, 新潮社(1990)。
- 30) 鶴井忠義：「斉明天皇と狂心渠」, 青垣出版(2012)。
- 31) 中臣鎌足は天智天皇(中大兄皇子)擁立に功績があつたとして天智8年(669)、死の直前に藤原姓を与えられる。そして、子の不平等の子孫だけが藤原姓を名乗ることが許された。鎌足の死によって、天智政権に陰りが見え始める。鎌足は、大海人皇子を巨猾と見做し大友皇子の後継を願っており、鎌足存命ならば、壬申の乱は起こらなかつたかもしれない。ちなみに、藤原不平等には天智天皇実父説がある。不平等の母が天智天皇に寵愛され、鎌足に下賜された鏡皇女であるためである。ともかく、不平等以降、藤原氏は祭祀氏族としての出自から政治氏族に変貌し、権臣として実務を担うことになり、大宝律令の編纂など律令制の確立に貢献する。壬申の乱のとき、藤原氏一族は、百濟遺民と命運を共にしていたので、当然、近江政権派と見做され、乱後に一掃されているが、不平等は子どもであつたため処罰を免れ、下級官僚から立身を始めた。そして、彼は、天武天皇の子で壬申の乱のとき、父大海人皇子に代わって軍を指揮した太政大臣高市皇子が死去(696年)した頃から、政権の中枢に参画するようになる。不平等には武智麻呂・房前・宇合・麻呂の4人の

男子と珂瑠皇子(文武天皇)の夫人ふにんとなった宮子と聖武天皇の後(光明皇后)となった光明子他の女子がいる。不比等は宮子と光明子を入内させることによって皇室との関係を深め、天皇家と一体化して藤原氏繁栄の基礎を築いた。

- 32) 遠山美都男：「壬申の乱」, 中公新書, 中央公論社(1998)。
- 33) 天武天皇が684年に定めた八種の姓。序列1位は真人まひとで、以下、朝臣あそみ、宿禰すくね、忌寸いみき、道師みちのし、臣おみ、連むらじ、稻置いなぎとなる。
- 34) 小島憲之 校注：「日本古典文学大系 69 懐風藻他」, 岩波書店(1976)。
- 35) 荒木靖生：「万葉歌の世界」, 海鳥社(2004)。
- 36) 仏教における仏(釈迦や如来)・法(仏が説いた真理)・僧(仏教の戒律を守る出家者)のこと。三宝に帰依して受戒することで正式な仏教徒とされる。

要約

今まで悲劇に見舞われた多くの皇子たちがいた。本稿では、万葉時代に生まれた悲劇の皇子たちから幾人かを編年的に取り上げ、悲劇に至る背景と経緯を概観すると共に悲劇に纏わる詩歌から彼らの心情を探る。ここに、万葉時代を16代仁徳天皇から47代淳仁天皇まで、即ち5世前半から8世紀中葉までの約350年間とする。皇子たちの悲劇の原因の主たるものは皇位継承に関わる皇族間での熾烈な政権奪取の武力闘争であるが、同母兄妹の姦通によって皇太子を廃された皇子、また強大な権力を握った臣下に一族が亡ぼされた皇子もいる。例えば、16代仁徳天皇と29代欽明天皇の多くの子や孫たちが非業の最期を遂げている。また、38代天智天皇の子大友皇子は壬申の乱に敗北し、36代孝徳天皇の子有間皇子と40代天武天皇の子大津皇子はそれぞれ策謀に嵌って、謀反の嫌疑で自殺に追い込まれている。大友皇子、有間皇子、大津皇子の3人はいずれも優れた教養人で、感動的な詩歌を残している。